

思いついたら書く短編集

荒潮提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いついたクロスオーバーとか書いて来ます。

別名暇つぶし作品。

タグはたまに増える。

※題名変えました

目次

戦姫絶唱インフィニット・シンフォギア	1
戦姫絶唱シンフォギア ー 君ト言ウ音楽尽キルマデ ー	10
艦CORE ナニカされた山城さん	30
無限の境界く死を見る者く	38
ガトリング少女の成層圏	49
マテスト番外編 デュエル・マスターズ!	55
暗黒の星を照らす光	80
マテスト: Reflection編予告	86
戦姫絶唱シンフォギア ー 君ト言ウ音楽デ尽キルマデ ー 2話	90
マテリアルズ・ストラトスDetonation予告	97
マテスト番外: 箒主役のXD編「銀腕の鎮魂歌(レクイエム)」 予告	101
編	
オモイをマトウ少女と歩む夏	105
オモイをマトウ少女と歩む夏 2	117
オモイをマトウ少女と歩む夏 3	122
オモイをマトウ少女と歩む夏 4	128
ー CADENZAの姉妹の妹の夏 ー	133
青薔薇に恋する操縦者	138
少年に寄り添う白い女神	145

戦姫絶唱インフィニット・シンフォギア

「・・・ああ、分かっているよ千冬姉。だーいじょうぶだって。心配しないでくれ。んじゃ。また後でな（ピッ）さてと、近くにケーキ屋あったかな？」

魔法少女事変も終わり俺たち装者に暫しの休日が与えられ災害やテロ行為など無く今の所は平和に過ごしている俺たち。

今は世間一般で言う夏休み。

奏姉もリハビリから復帰しツヴァイウイング復活コンサートも終わり久しく過ごしていなかった日常を楽しんでいる。

今日も俺はバイク（YAMAHAVMAX Fate/ZEROモデル）を走らせ街を颯爽と走る。

今日は響は朝から友達とショッピング、クリスは切歌と調の適合係数上昇訓練の為にS・O・N・Gに行ってるしマリアさんと翼姉はイギリス、奏姉はレッスンで不在。

てか響はクリスと一緒に切歌達の訓練見る予定だったろ。

んで暇していたところに千冬姉からIS学園に來いとお達し。

何をするか内心ヒヤヒヤしてるがとりあえず土産だけ買って行きますか。

「遅くなりましたあッ！」

「やっと来たか。遅いぞバカ！」

「ごめくん、クリスちゃんツ！それで、切歌ちゃんと調ちゃんは？」

「もうトレーニングルームに入ってるよ。丁度これから始めるところ

だ。ところで一夏は？」

「今日はバイクでツーリングだって。それより今日の訓練は適合係数上昇訓練だっけ？」

「ああ、LINKERを使ったギア運用はあいつらの身体に負担を掛けるからな（私にも声掛けろよなボソツ）」

「おお？今のクリスちゃん、なんだか、すごく頼りになる先輩っぽい。後、最後なんて言ったの？」

「ちやつ、茶化すな、このツ!!!後最後のは聞かなかったことにしろ！」

「あいつたあツ!？」

「……ごほん。準備はいいか、2人とも？ぼちぼち始めるぞ」

「……はい、いつでも大丈夫です」

「右に同じく。どっからでも掛かってこいデスツ！」

「んじや、始めるか。行くぞ！」

数時間前の一夏。

「よし着いた……のは良いが何処に行けば良いんだ？此処に来たの束さんが俺に無人ISとアルカ・ノイズとの融合体をけしかけて来てそれに叩き落とされた時だけだしなあ……。誰か居ないかなあ」

「あれ？もしかして天羽さんですか？」

「あれ？山田先生じゃないですか。どうしたんです？こんな所で」

「偶々散歩に出て居たら見かけたんですよ。それより天羽さんもどうして此処に？」

「千冬姉に呼ばれました。今何処に居ます？」

「ご案内しますよ。こちらです」

「一夏はまだかあ！」

「……」

「山田先生少し離れて居てください。それと先に謝っておきます……
ごめんなさい」

「え？あっはい……」

「さて、やるか相棒……『alteisen rise』」

部屋の中。

「一夏の奴遅いな。何処で油を売っているんだ」

「ち、千冬さんお酒は程々にしないと……」

「じゃないと一夏兄に怒られるよ？」

「うるさい！こんな時ぐらいじゃないと飲めないんだ！一夏はまだ
かあ！」

『alteisen rise beowulf tron』

「……」

「ブチ抜け！バン」

カアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!』

ドゴオ!

「酒飲みバカ姉は此処かあ!」

「い、一夏!?!い、居たのか!?!てか何故シンフォギアを!?!」

「人を呼んどいて呑気に酒を飲んでるバカ姉を制裁するためだ!持つてけクレイモアあ!」

「ちよ、おまつ!?!」

『ギガデストロイクレイモア』

この日、IS学園の1室とある世界最強の悲鳴が鳴り響いたという。

そして関係のないこの爆発をやらかした容疑者の幼馴染他弟の友人数名が犠牲になったという。

「・・・で?何でいきなり模擬戦?」

「お前が秋斗の部屋を吹き飛ばしたからだろうがこの馬鹿者が・・・!」

「それに一夏兄の実力をこの目で確かめたいとも思ってたしね」

「シンフォギア装者の力、見せてもらおう!」

「唯一ノイズに対抗できる力、それがどれほどのものかじっくり見せてもらおう」

「一夏さんの今の実力、それを見せてください!」

「秋斗のお兄さん・・・その強さ気になります!」

「それに皆がこんな状態だし・・・」

「まあ、今日は暇だし良いんだけどさ・・・なんで1vs7なんだよ・・・」

「二」「実力差考えろ」

「サーセン」

へbgm 鋼鉄の孤狼の作者オリジナル歌詞によるオリジナル曲 撃拳・ベイオウルフ

「さあ、行くぜ！ 『貫け道を 打ち抜け壁を』」

「歌い始めたか・・・！いきなり全力という事か！」

「行くよ皆！」

「二」「おう！」

「『最後にお前がそばにいるのならば 俺はそれ以外 望まない。H

OW I ベイオウルフウウウウウ!!』」

『ギガサドンドレス・インパクト』

「零落白夜ああああああああああああああああああ!!」

「おおおおおおおおおお!!『さあ、打ち貫け 己の運命分の悪い賭けはキライじゃないぜ！たぎれ魂！バーニングソウルそれこそ俺のジョーカー』」

決着はどうなったか・・・それはここで語るべきではない。
いずれ語られるだろう。

設定集

天羽 一夏（織斑 一夏）

このシリーズ主人公。

唯一の男性シンフォギア装者。

11歳の時にノイズの襲撃に巻き込まれガレキの中で気を失っていたところを天羽 奏が見つけた保護されている。

その際記憶を無くしており唯一覚えていたのは一夏という名前だけだった。

この時実はノイズが起こした爆発で何故か其処にあった聖遺物であるベイオウルフの破片が両腕に入り込み融合していた。

その後奏に弟として引き取られ記憶が戻った後も天羽姓を名乗っている。

一夏が12歳の時ツヴァイウイングのライブにノイズが襲撃、この時ノイズの集中攻撃を受け傷つき倒れそうになっていた（この時奏は響を助けていた）姉を見て自らも力を望みそれにベイオウルフの破片が答えシンフォギアとなり唯一の男性シンフォギア装者として覚醒する。

だが何故かシンフォギアを纏うと女体化する。

その後15歳の時にルナアタック事変が起きそれを響、翼、そして幼馴染であり長い間離れ離れだったクリスと共にこれを阻止。

その後フロンティア事変、魔法少女事変と次々と仲間たちと共に乗り切っている。

実の姉と弟である千冬と秋斗とは魔法少女事変にて錬金術師側に付いた束の放ったアルカ・ノイズゴーレムと戦闘の際偶然IS学園の

アリーナに叩き落とされた時に再会、記憶もその時に戻っている。
現在は色々ギクシャクしながらも良好な関係を築いている。
現在クリスと交際中。

シンフォギア ベイオウルフ

聖詠『al t e i s e n r i e s e b e o w u l f t r o
n』

イメージ図

かつてノイズ襲撃により失われたはずの聖遺物。

その襲撃に巻き込まれた一夏の両腕に爆発で飛び散ったベイオウルフの破片が入り込んだ事により残っていた。

聖遺物本体はパイルバンカーの付いた右腕である。

一夏の纏うベイオウルフは他のシンフォギアと比べると遥かに硬い装甲を持っており並大抵の攻撃では装甲に傷すら付かない。

さらにスピード自体も桁違いで特に真つ正面から突撃した際のスピードは圧巻の一言である。

アームドギアは両腕のパイルバンカーと両肩のウエポンコンテナ。

これらに変形し大型のブースター付きパイルバンカーや3連マシンキャノン、クレイモアやミサイルを発射するコンテナとなる。

また、大剣やハンマー、2振りの両刃剣やレールガンとなる。

腰のスカートはそれぞれが独立したブースターになっておりこれ自体が変形して大出力のブースターとなる。

ルナアタック事変後ベイオウルフの一部の武装と各種ブースターや装甲が改良され更に硬く、早くなり一撃が重くなっている。

(イメージ図のイラストは改良後)

脚部からアンカーを打ち込みその場で軌道変更したりできる。

必殺技

「リボルビングステーク」

改良前はこの状態。

リロードが若干違う。

「リボルビングバンカー」

更に大口徑になり破壊力UP。

「スクエア・クレイモア」

チタンベアリング弾を発射する。

環境被害大。

「メガデストロイ・クレイモア」

小型ミサイルをチタンベアリング弾の代わりに撃ちまくる。

「アヴァランチ・クレイモア」

スクエア・クレイモアより環境被害大。

「ギガデストロイ・クレイモア」

メガデストロイクレイモアより発射数の威力UP

「サドンインパクト」

どうみてもビツク○オーです本当に（ry

「ギガサドンデスインプクト」

両腕のアームドギアを射出、その後アームドギアが4つの大型ブースター付きのと巨大なバンカーの付いた物となり合体、それに片足をライダーキックの要領で合体後ブースターが起動しそのまま対象に突っ込みバンカーが撃ち込み撃破する。

地面に直接撃ち込んだ場合巨大な十字の地割れが起き其処から衝撃波を発生させる。

その十字の大きさは約2km。

衝撃波は高さ50mまで登る。

「ホーンブレイド」

頭部の角が伸びそれを振り下ろして斬りつける。

「ヴァイスリヒター」

レールガンを撃ちまくる。撃った弾丸は貫通し次々と敵を貫通する。

「ファイナル・ストライクアーベント」

レールガンが上下に展開し新たにバレルが延びて来てエネルギーをチャージして放つ。

別名ツインサテライトキャノン。

「J. O. K. E. R.」

全ての武装を使い敵の群体を壊滅させるまさに切り札。

具体的には両腕のマシンキャノンを乱射してからギガデストロイクレイモアを発射。

ホーンブレイドで切り上げヴァイスリヒターを360度にばら撒きそしてバンカーで突っ込む。

これだけ。

「ライトニングブレイカー」

ハンマーモードのブースターを点火し地面に叩きつけ辺りにクレーターが出来るレベルの速度で突っ込む。

続くかは未定。

戦姫絶唱シンフオギア ー 君ト言ウ音奏尽キルマ
デ ー

私は・・・どうなったんだ・・・？

ここは・・・何処だ・・・？

ああ・・・思い出した・・・

私は・・・唱ったんだ・・・

絶唱を使つて・・・ノイズを殲滅して・・・そして死んだんだつた

翼は大丈夫だろうか・・・？

助けたあの子は無事だろうか・・・？

ああ・・・なんか考えてたら眠くなつて来た・・・

少し寝てから考えても遅くないよな・・・？

お休み・・・翼・・・

「おい寝るな！」

「うっせえ！こっちは思いっきり歌って疲れてんだ！少しは寝させろや！」

「あっはい・・・すみませんでした・・・」

へんな白い髭面のおっさんに昼寝を邪魔された。

思わずブチギレて叫んだ私は悪くないと思う。

つい聖詠を歌いそうになったけど別に良いよな。

「で？おっさん何の用だ？私は寝たいんだが、後ここ何処だよ」

「いや、こんな状況で寝るか普通？あと此処は転生の間でワシはお主らで言う神様じゃ」

「転生の間？なんだそりや、興味ないね。私はどっちかと言うと地獄がお似合いだよ。後おっさん神様だったのかよ」

「興味ないって・・・お主未練とか無いんか？」

「未練ねえ・・・」

おっさん（神様）にそう言われて私は少し考えた。

うちの家族は私以外全員ノイズに殺されたし私自身ノイズを殺せればそれで良かった。

少し心残りがあるとすれば翼とあの時助けたあの子がどうなったのかそれだけだった。

だけど・・・翼ともう少しだけ話をしたり買い物したりしたかったな・・・。

いつの間にか私は涙を流していた。

翼・・・。

何時も他の人の前では凛々しくかっこいいのに私の前だけでは普段誰にも見せないような表情で泣き虫になる翼。

いつも甘えて来ていじわると言いつつも満更でもない顔だった翼。

翼・・・会いたいよ・・・。

「あるじゃないか未練が。ワシなら元の世界に転生させるのもわけ無いぞっ。」

「本当か!？」

「じゃが今のお前さんの力ではまた死にかねんからもう。ワシからいくらか力を与えてやろう」

「力って・・・私ガングニールがあるんだけど・・・」

「お主の世界だとそのシンフォギアとか言うのは直ぐに使ったらお前さんが所属していた組織にバレるんじゃないやろ?ならワシが与えた力を使って暫く身を隠しながら過ごして時が来たらお主が会いたい人物に会えばよからう」

「それが良いのかな・・・ま、翼に会えるなら別に良いや。それで頼むよおっさん」

「おっさんって・・・一応ワシ神様なんだけどな・・・まあ、それは良い。お主に与える力とはあるゲームとアニメの力じゃ」

「ゲームやアニメえ?なんか胡散臭いな。ちゃんと使えるようなやつなんだろうな?」

「そこは安心せい。他の転生者共がこぞってこれやこれと似たような奴を選択するからもう。使い手次第じゃ最強の力にもなりうるぞ」
「へえ?そいつは良いな。どんな奴だ?」

これじゃあまだ絶唱を唱っている方がマシだ。
足元がフラつき目が霞んでうまく見えない。

この時私は知らなかったが私の身体から無数の剣が生え、おびただしい量の血が床を染めていた。

意識が朦朧とし思わず倒れそうになったその時、私の目の前に紅い外装を纏い白い紙をオールバックにした全身褐色の男が、フードを深くに被り、赤いマフラーで口元を覆った男が、紅い外装を纏った男と同じ褐色で黒い服を来て髪をボブカットにし両手に刃がついた拳銃を持った男が見えた。

紅い外装を纏った男はこちらに背を向けたまま頭だけこちらを向けてこう言った。

ー ついてこれるか？ ー

それを聞いた瞬間私はなんだか小馬鹿にされた様で無性に腹が立った。

何がついてこれるか？だ。

ふざけんな。

「ついて……これるかじゃねえ……ゲホッゲホッ」

「お、おい大丈夫か……？」

「テメエの方が……！ついて来やがれええええええええええ!!」

私は叫んだ、精一杯、命の限り。

私は生きるのを一度諦めた。

だから、今回は諦めない、だから叫ぶんだ。

この命がある限り！

気づいたら私はベッドに寝ていた。

周りは相変わらず真っ白だが。

どうやら私は気絶していた様だ。

ふと髪を見るとオレンジだった髪は白くなっていた。

まあ、それは別に良いや。

私が貰った力はどうなったんだろう。

ふと、頭に浮かんだイメージと言葉があつた。

「トレース・オン
投影、開始」

そう呟いてみると手には頭に浮かんだイメージ通りの双剣が握られていた。

名前は確か……干将・莫耶。

なんでだろう急に頭に名前が浮かんで来た。

そーいやあのおっさんが確か記憶がどーたら言ってたな。

多分それか。

んでベッドから降りたは良いが来ていた服（ライブで最後に着てい

た衣装だ）は何故か刃物が刺されたかの様に穴だらけだった。

色々と恥ずかしいので着替えたかった。

ふとまた頭にイメージが浮かびそれを纏うイメージを浮かべた。

そしたら自分の服が気絶する前に見たあの男の服と似た様な感じになった。

（礼装イメージ：アチャ子の赤原礼装の上とエミヤの赤原礼装のズボンが合わさった感じ）

「ふむ、ちゃんと使えとるようじやの。これなら問題はないな」

「あ、おっさん。いたんだ」

「今様子を見に来たところじやよ。ところでお前さん、少しその力をきちんと使える様に特訓するのはどうじや？場所と相手ならワシが用意してやるしいう」

「良いねえ、乗った。ぶつつけ本番で使うよりマシだしな。よろしく頼むよ」

「あいわかった。ではお前達、後は頼むぞ」

「ふむ、何故呼ばれたのかと思えばこういう事か。了解した、初めましてだな天羽奏」

「あつー！お前は走馬灯に出て来た！」

「ほう・・・その反応だと力を受け取った時に私達が走馬灯にでも出たか？では自己紹介だ。サーヴァントアーチャー、エミヤだ。よろしく頼む。ほら、じいさんも貴様も自己紹介しないと」

「分かってるよシロウ。僕もサーヴァントだ。クラスはアサシン、僕もエミヤだ。まあ、呼びづらいだろうし僕の事はキリツグとでも呼んでくれ」

「ふんっ・・・サーヴァントアーチャー、エミヤ。オルタとでも呼べ」

「お、おうよろしく・・・」

「では早速だが始めよう。先ずは君の実力からだ。来い！」

「へへっ良いぜ。そうこなくっちゃな！Croitzalronz

e l l G u n g n i r z i z z l ー ー ー

「ほう、それがシンフォギアか。では、いくぞー！」

「いくぜー！」

その後私は容赦なく叩きのめされ負けた。

それから私の戦い方の問題点を挙げていきそれを直しつつ私が受け取った力を使うための修行が始まった。

何度も血を吐いたし、死にかけて。

特に固有時制御を初めてトリプルまでした時は3日間寝込んでしまった。

オルタに関しちやガチで殺しに来てたから避けるのに精一杯だった。

容赦なく頭を狙ってくるもんだからヒヤヒヤしたよ。

まあ、あいつが使い方を教えてくれたから銃もキチンと使えるようになったんだが。

ツンデレなんだか未だに良く分からん。

キリツグさんには固有時制御の使い方ですぐ世話になった。

本人も固有時制御をモノにするのに苦労したそうであらう失敗しても何処がダメだったのか一緒に考えてくれた。

まあ、起源弾の製造方法聞いた時は流石に引いたけど・・・。

エミヤは何とかまあ、・・・オカンという感じだった。

メシは美味しいし、面倒見も良いし。

修行に関しては弓と剣の扱いを中心に教えて貰った。

でも普通にオカんだから家事とかも教えて貰った。

あまり家事出来ないしこれは本当に助かった。

そして修行してたらいつの間にか2年の月日が流れてた。

「これで……！終わりだあ！」

「グフツ……!?見事だ……これで修行は終わりだ奏」

「ハアツハアツ……じ、じゃあこれで……？」

「ああ、よく頑張ったな奏、お前も一人前だ。だが、鍛錬は忘れるなよ。普段の鍛錬を怠れば錆びた剣と同じ。それを忘れるなよ」

「ああ、ありがとなエミヤ。キリツグさんもオルタも今までありがとう」

「うん、頑張つてね奏。僕達は応援してるよ」

「ふんつ、精々無駄死にだけはするなよ」

「終わったようじやのう」

「あ、おっさん」

「だから神様じゃって……さて、奏よ。お主の修行も終わり転生の準備も出来ておる……お別れじやな」

「ああ、2年間世話になったな。じゃあ、行くよ私」

「もうか？早いもう……もう少しくつろいで行けば良いのに」

「あまり長くいたら別れが辛くなるからな……じゃあな、エミヤ、キリツグさん、オルタ……神様」

「気をつけての。一応転生先は使われてない廃墟にしておいた。其処は許してくれ。人前に出すわけにはいかんからのう。生活に必要なものはあらかじめ用意してあるからそれを持って行ってくれ」

「ああ、何から何までありがとな。それじゃ、あばよ皆！」

「気をつけての」

こうして私は帰って来た。

とりあえず神様が言った通り生活に必要な物資やお金、後は私の服があった。

それらを回収してさっさとこの廃墟を後にした。

しばらくどうやって収入を得ようか考えてたら警報がなった。
聞き慣れたノイズが現れた事を知らせる警報。

私は荷物を背負ったまま脚力強化を施し駆け出した。
ノイズを倒す為に。

私の目の前で誰かが傷つくなんて事は絶対にさせない！

「な、何じやこりやあああああああああああああああああ!?!」
「お姉ちゃんすごい! かっこいい!」

私、立花響は突然の事態に絶賛困惑中です。

胸に浮かんだ唄を唄ったらなんか纏ってました。

何だかよく分からないけど今は逃げなきゃ!

とか考えてたら目の前にノイズがいて攻撃体制に入った。

私とはつきに一緒に逃げて来た女の子を庇うように前に出た。

だけどノイズの攻撃はいくら待っても来なかった。

恐る恐る目の前を見てみるとノイズは大量の剣で串刺しになって
いた。

何が起きたのか困惑していると目の前に誰かが降り立った。

「大丈夫か?」

白い髪を無造作にポニテみたいに結び赤い服を来て顔を仮面と赤
いマフラーで覆った女の人が黒い銃をノイズに向けながらこつちを
向いていた。

私はとりあえず大丈夫ですと言ったら女の人は安心したのか少し
安堵した顔をしたかと思ったらノイズの方を向いた。

「ここからは任せな。ノイズは私が片付ける」

そうやって女の人は駆け出した。

向かう途中で私は仮面とマフラーを投影して顔を隠した私はノイズに襲われそうになっていたガングニールらしきギアを纏った女の子を助ける為に剣を投影してノイズに向けて投擲した。

投擲した剣に貫かれたノイズは炭素となって消えた。

そのまま私は降り立ち女の子の無事を確認した後右手に銃剣干将を投影しノイズの群れへと駆け抜ける。

近寄ってくるやつには容赦なく弾丸を浴びせ、斬り裂いた。

何体目か分からないノイズをぶっ殺した私は来るときに蒔いておいた監視用の簡易礼装からの信号で一旦引くことにした。

何故かって？翼と二課の連中が近くまで来てたんだよ。

会話しただけでもバレると分かっているので私は干将・莫耶を近くにいたノイズに突き刺し爆破させた。

簡易的な煙幕が出来たので急いでその場から逃げた。

そこからは私は世界中を旅した。

ある時はテロ組織をぶっ潰し。

ある時は人身売買の組織を壊滅させ売られようとしていた子供を救った。

そんな旅を続けていたらいつの間にか私は「紅き戦乙女」なんて呼ばれ始めた。

んで私は何やかんやで日本に帰って来たのだが……。

「帰国そうそうノイズの大群のお出迎えか。良いぜ、相手になってやるよ！久しぶりに出番だ GANG ニール！ Croitzalron zell Gungnir zizzl・・・」

私の GANG ニールはいつの間にか赤原礼装みたいになっていた。原因は知らねーけどとりあえずノイズをぶっ殺しますか！

「これは・・・!? 指令！ 大変です！」

「どうした何があった？」

「こ、これを！」

「が、GANG ニールだとお!？」

「オラア！ まだまだ私は暴れたりねえぞ！」

久しぶりに GANG ニールを使って暴れまわっている私。

何故か LINKER 無しでも GANG ニールを使える様になっていた。

そこらへんも神様がどうかしてくれたんだろう。

キヤリコをばら撒き投影した剣を雨の様に降らせてノイズを殲滅していたらなんかでっかい衝撃波が来たんで慌てて回避した。

そしてノイズが炭素化していく中私の目の前に見知った顔が降りて来た。

「嘘・・・奏・・・？奏なの・・・？」

「よう翼、久しぶり。まあ、色々あったけど帰って来たよ」

「奏え！」

「おつととりあえず先ずはノイズを殲滅しないとな。行こうか翼、ツヴァイウイング復活だ！」

「うん！」

翼ともに空に私は飛び立った。

なんか私のガングニールに翼付いてたり色々変わったりしていた。

アームドギアもなんかデカくなっていた。

その後ノイズを殲滅したりノイズと融合した了子さんー フィーネーと対峙したり暴走したあの時助けたガングニールを纏っていた女の子を止めたり落ちて来る月のかけらをぶっ壊したり色々あった。

そして今は。

「奏・・・」

「んう？どうした翼？」

「奏！」

「おつと、翼あ、見ない間にまた泣き虫になったんじゃないのか？」

「奏の前なら私は泣き虫で良い・・・しばらくこうさせて・・・？」

「良いよ、翼が満足するまで抱きついてて良いよ」

「ふにゆう・・・奏え・・・」

今は二課の非常職員として本名を隠して所属している。
今の名前は「衛宮みなみ」
皆の訓練の相手をしたり簡単な事務処理をしたりしてる。
色々あったが翼が側にいるから私は幸せだ。
この幸せをぶっ壊す奴は誰であろうとぶっ飛ばす。

ステータス紹介もしこの奏さんがサーヴァントになったら

クラス：ランサー

真名：天羽奏（衛宮みなみ）

属性：中庸・中立

性別：女性

身長：169cm

筋力：B

耐久：C+

敏捷：A

魔力：B-

幸運：D

宝具：A

クラス別能力

対魔力：B |

転生した際に魔術回路が後付けされた為本来無かった魔力が身体に宿っている。

回路の本数は32本。

保有スキル

心眼（偽）：B

気配遮断：A

シンフォギア装者：EX

歌うことで自らのステータスを2段階上げる。

FGOでは自らの *bastard arts*、*quick* の性能を 10% up

投影魔術：B+

固有時制御：A

固有結界の体内展開を時間操作に応用し高速移動する。

ただし使用後には世界からの修正力により身体に負担がかかる。

FGOでは自身に無敵と回避を付与。（1ターン）

絶唱：EX

歌唱にて増幅したエネルギーを一気に放出し敵に甚大なダメージを与えるシンフォギア装者のみが見える切り札。

だが使用後は自身にとんでもないバックファイアが襲いかかる為そう易々と使えない正に切り札。

FGOでは自身に攻撃力up、宝具威力up、与ダメージプラス付与、b a s t a r u p付与、クリティカルup付与、敵全体にb a s t a r 耐性ダウン付与、自身の攻撃に追加効果付与、無敵貫通付与、敵全体の防御ダウン、必中付与（1ターン）自身のHPを1にする、自身にターゲット集中状態付与、自身に対するガッツ、防御力up、無敵、回復などの補助効果無効。（1ターン）

再臨

第1再臨：いつもの GANG ニールのギアの上にフード付きコートを被りフードを目深に被り、口元に赤いマフラーを巻いている。

第2再臨：コートを脱ぎ上半身はエミヤの第2再臨の服装で来ていた赤原礼装の上着は腰に巻いている。

所々に GANG ニールのギアのパーツが付いている。

この時第1再臨の時は薄っすらとしか見えなかった髪の色が分かる。

髪の色はオレンジかった白髪。

第3再臨：上半身がアチャ子の赤原礼装に、下半身がエミヤの赤原礼装のズボン、首に赤いマフラーを巻き両腰にエミヤオルタの銃剣をホルスターに収めている。

GANG ニールは頭の耳についているのとお尻の部分のリボンみないなパーツのみ。

最終再臨：ツヴァイウイングとしての最後のライブで着ていた衣装を来てライブに立っている。

その背中の方には第3再臨の赤原礼装を着た転生した自分が立っている。

隣には彼女の片翼が歌っている。

宝具「無限に奏で我が愛しき片翼に捧げる歌」

かつて自分が愛した愛しき片翼に捧げる絶唱。

固有結界を展開しその中で唱う奏の宝具。

その威力は自ら展開した固有結界を破壊するほどの絶大な破壊力。

絶唱を使い自らのステータスを底上げし更にXDモードを発動さ

せそのままULTIMATE∞COMETで突っ込む。その威力は

固有結界を一撃で粉碎する。

この瞬間だけは対界宝具と同等の扱いとなる。

FGOでは敵全体に防御無視の超強力なダメージ、自身にbast

arup、宝具威力up付与（1ターン）

ボイス集

召喚時：「サーヴァント、ランサー。天羽奏だ。あんたがわたしのマスターか？よろしくな！」

レベルアップ時：「良いね良いね。じゃんじゃん行こうか！」

第1再臨：「ふう、あのコート周りの風景に溶け込めるから便利なんだけど暑いんだよなあ。ん？なんだ？見たいのか？見たらその頭に風穴空くぞ？」

第2再臨：「ん？歌を歌って欲しいって？それぐらいならお安い御

用さ！」

第3再臨：「ああ、良いねえ。今なら私の全部を空っぽにして全力で歌えそうだ。だけどそれを歌うのは本当に追い詰められたどうしようもない時だけ。なあ、マスター。あんたは私がどんな姿になっても私の歌を聞いてくれるかい？」

最終再臨：「はは．．．まさかまたこの格好でステージに立てるなんてな．．．。なあ、私。今、この瞬間だけはツヴァイウイングとして歌わせてくれ。例えこれが一時の夢であったとしても良いんだ。幻想であったとしても私の片翼と一緒にいてくれるんだから．．．」

絆1：「ん？どしたー？」

絆2：「私の歌は誰かを幸せに出来るのかな。マスター、あんたは幸せかい？」

絆3：「なんだー？膝枕して欲しいのか？良いぜほら、来なよマスターー。」

絆4：「私の歌が聞きたいのか？良いよ、あんたが私の観客だ。私の奏でる歌を聴け！」

絆5：「全く、私みたいな奴にここまで付き合うなんて物好きな奴だな。良いぜ、あんたとなら何処までも飛べそうだ。この世の果てまで付き合ってやるよー！」

戦闘。

攻撃1：「オラア！」

攻撃2：「持ってきな！」

EXアタック：「これが私の全力だ！」

bastarカード：「ふふん！」

artsカード：「奏でるぜ！」

quickカード：「歌うぜ！」

スキル1：「バーロー！」

スキル2：「やってやらあ！」

宝具カード：「私の奏でる歌を聴けえ！」

宝具：「Gatrandis babel ziggurat
denal
Emustolronzen fine el baral z
izal
Gatrandis babel ziggurat eden
al

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l z i z z l 。 私
の全てを空っぽにして・・・奏でるは片翼に捧げる私の歌！「
無限アに奏ンで我が愛リしき片翼ミに捧テげる歌ド」！」

H P O 時 1 : 「ちつくしょう・・・」

H P O 時 2 : 「ああ、思いつきり歌ったから腹・・・へつたなあ・・・」

艦CORE ナニカされた山城さん

その艦娘はナニカ変だった。

建造した頃から色々と可笑しかったのだ。

『扶桑型戦艦2番艦山城よ。私は傭兵、この命、好きに使いなさい』

普通とは違うこの山城は戦い方も可笑しかった。

何故か空を飛び、両手に出現した武器で深海棲艦を瞬く間に殲滅するトンデモない奴だった。

これはそんなちよつと可笑しなナニカされた山城のお話。

「あいむしんかくとうくとうくとうくとうくあいむしんかくとうくとうくとうく」

「ここにいたのね山城」

「姉様、どうされましたか?」

「提督がお呼びよ、どうやら大本営からの依頼だそうよ」

「またあの依頼ですか・・・最近多くありません?」
「そうねえ・・・確かに多いわねそういう鎮守府・・・でも山城のお陰でそういう鎮守府が少しずつだけ無くなっているのも事実よ?」
「まあ、そうですね・・・では行って来ますね姉様」
「はい、行ってらっしゃい山城」

執務室

『提督、山城です』
「入ってくれ」
『分かりました・・・こ・・・の・・・!開かないわね・・・!うざりたい!』(ガキイイイン!)
「グホオア!」
「長門!」
「あら?長門いたの?ごめんなさいねドアの建てつけが悪かったのよ」
「だからと言って蹴つ飛ばすな馬鹿者が・・・執務室に何の用だ山城」
「いつもの依頼よ。それで提督?今度はどこの鎮守府をぶつ潰せばいいの?」
「呉に3〜4ヶ月前に新しく出来たばかりの鎮守府だ。資料はこれだ、確認してくれ」
「はいはいつと・・・うわっこれは酷いわね・・・出来て1ヶ月でもう陸奥と金剛型の2隻が練度80超え、さらには捨て艦戦法常習・・・さらには艦娘に強制的に奉仕活動強要、駆逐艦達に暴力・・・使えなくなったら捨て艦戦法・・・情状酌量の余地なしね、骨すら残さずぶつ潰すわ」
「ああ、頼む。報酬はいつもの口座に振り込んでおけば良いのか?」
「ええ、そうしてちょうだい。私は武装のアセンブルに入るわ」

私はドックに行き私専用で作られているガレージに入る。
中には様々な武器が置かれている。

両手に持つアサルトライフルやマシンガン、ライフルにスナイパーライフル、ショットガン、ハンドガン、バズーカ、レーザーライフル、プラズマライフル、ブレード、レーザーブレード、パイルバンカー、シールドや背中に取り付けるグレネードキャノンやミサイル（これだけでかなりの種類がある）、レーザーキャノン、プラズマキャノン、ロケット、スラッグガン、チェインガンが置かれている。

最近は肩につける装備が出て来て連動ミサイルとかミサイル迎撃装置とかつけてる。

今回はいつもの艦装に両手にKARASAWA（AC3仕様）腰に重ショットガン「SAMPAUITA」とレーザーブレード「月光（AC4系）」を装備、さらにグレネードキャノン「OGOTO」×2と垂直発射ミサイル「WHEELING03」×2と肩に分裂連動ミサイル「061ANRM」を装備する。

アセンブルが終わりカタパルトに向かう。

カタパルトに足をつけると後ろにはV・O・Bがセットされる。ただ細かい調整は妖精や明石と夕張がやってくれる。

全ての準備が完了し私の意識は傭兵よりへと変わる。

「山城さん準備完了です！いつでもどうぞ！」

「カタパルト展開！発進、どうぞ！」

「了解、山城出るわ」

V・O・Bが点火すると同時に周りに防壁が現れ衝撃波やバックファイアから夕張達を守る。

そのままV・O・Bで目標に向かって旋回しながら艤装に搭載されたブースターも展開し突撃する。

ものの数分で目的の鎮守府についた私はそのままV・O・Bをパージし上空に飛び上がる。

その間大量の対空兵器がこちらを狙うが全く当たらない。

鎮守府上空についた私は艤装の試製41cm3連装砲×2と41cm連装砲、グレネードキャノンと垂直発射ミサイルと分裂連動ミサイルを一斉射、艦娘を狙わずドックや工廠、対空兵器等を中心に狙う。ミサイルとグレネードキャノンを撃ち尽くしてパージしそのまま地上に降り立つ。

その瞬間周りを艦娘に囲まれる。

皆全員主砲をこちらに向けている。

だが、この配置は有効であり弱点でもある。

私は両手に構えたKARASAWAを囲んでいる艦娘の武器だけを狙い破壊していく。

艦娘達も応戦するが私が交わす度にその砲撃が他の艦娘に当たっている。

KARASAWAの残弾が少なくなると同時に艦娘達も蹲り倒れている。

そのままKARASAWAを迎撃に来た地上兵器に撃ちまくりながらこの鎮守府の執務室に向かう。

「クソが！一体何なんだよ！何でバレたんだよ！この屑どもが！貴様らがヘマをしたからこうなつたんだぞー！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「(ガアンガアン!) 邪魔するわよクソ野郎」

「き、貴様！何者だ！ここは俺の鎮守府だぞ！」

「黙りなさい大本営からの依頼で貴方を潰しに来たわ」

「お、俺の父親は大本営の元帥だぞ!?お、俺に手を出したら親父が黙っていないんだぞ！それでも良いのか!？」

「・・・ぷつ、あつはははははははは!!あー可笑しい・・・あんた何にも知らないのね、あんたの父親の事も、私の事も」

「な、何だとお・・・！」

「あんたの父親は逮捕されてるわよ、2週間前にね」

「う、嘘だ！デタラメだ！」

「ならこれを見なさい。真実が書いてあるわよ」

「そ、そんな・・・」

「それに私はこういう依頼をよく受けるのよ。こんな噂聞かないかしら? 『ブラック鎮守府を襲撃する紅い死神』っていうの」

「ま、まさか・・・！」

「スクラップの時間よ。やり過ぎたのよ、貴方は」

「く、来るな・・・来るなあああああああああああああああああ!!」

「煩いわね、さっさと死になさい。あんたは私の独断で処遇が決めれるのよ。これで地獄に落ちなさい」

「お、おい！た、助け（ズガン!）・・・」

「これで終わりね・・・あんたはどうするの? 朝潮型駆逐艦の霞」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「・・・あいつ一体何をこの子にしたのよ。もう大丈夫よ、貴方を虐める奴はもういないわ」

「・・・ほんと?」

「ええ、だから安心しなさい・・・つと憲兵が来たみたいね。それじゃ、またね」

「っーま、まってー！」

「・・・どうしたの?」

「私も・・・私も連れて行って！」
「・・・え？」

「・・・それで連れて帰って来たわけか」

「ええ、・・・なんかほっとけなくて・・・」

「・・・(ヒシツ)」

「懐かれたな山城」

「良いでしょ別に・・・それよりはいいこれ」

「なんだこの血濡れのタグは？」

「あのクソ野郎が持っていたやつよ。あいつの父親にでも見せてやれば分かるんじゃないの？」

「分かったこれは預かっておく。お前はその子連れて風呂に行つてこい。弾薬費などの清算は私がやっておく」

「了解よ。それじゃ、行きましようか」

「うん！」

その戦艦の魂にはかつてイレギュラーと呼ばれた者達の魂が混ざり合い産まれし存在。

その艦が通った後には何も残らない。

全てを真っ黒に焼き尽くす死を告げる艦。

それが彼女だ。

山城

何故か建造された時にアーマードコアの歴代主人公の魂が混ざり合ってしまった建造された山城。

性格は変わらないが敵と見なした者には容赦無く死を与え、味方は絶対に守る。

余りもの強さに大本営から通常の出撃や演習に出る事を禁止、大本営からの直接の依頼もしくは大規模作戦でしか出撃の許可が下りない。

艦装自体はあまり変わりはないがブースターや武装懸架用のハー

ドポイント等が増設されている特別仕様。

服装自体は通常の山城の服装だが色が血に染まったかの様に紅くなり金で刺繍された牡丹が付けられている。

無限の境界く死を見る者く

2000年8月になったばかりのある日の夜、篠ノ之箒が訪ねて来た。

「こんばんは、相変わらず気怠そうだな一夏。たくつ……いい加減鍵くらいかける。あとこれは冷蔵庫に入れておくぞ、今日は暑いからな」

「冷たい食べ物は好きじゃないんだが」

「我が儘を言うな。それと、千冬さんから聞いたぞ。お前、また学校サボっただろう。出席日数は確保しておかないと卒業出来なくなつても私は知らんぞ」

「箒には関係ないだろ」

「関係ある。千冬さんからお前の世話を頼まれているんだ。聞いたぞ、退院してからふた月、連絡も入れてないんだらう？」

「ああ、とりわけ用も無かつたしな」

「用つて……お前なあ……」

「しようがねえだろ、たとえ姉だろうが今のオレには他人同然なんだよ。そんな奴と会話出来るか」

「あのなあ……用が無くても家族というのは団欒するものなんだ。私が言えた義理では無いがな……。それに一夏、お前の方から心を開かないとずっとこのままだぞ？実の家族が近くに住んでいるのに顔も合わせないなんてそんなのは駄目だ。円香と冬樹が会いたがつたぞ」

幼少からの親友だというこの女はこうしていつも人の心の在り方を心配する。

そんなのどうでもいい事だというのに。

「飛び降り」

「ん？」

「飛び降り自殺」

「ああ、最近多いな。もう4人目だったか？・・・気になるのか？」

「まあな・・・あれは事故になるのか？」

「うーむ・・・どうだろうか。自殺である以上自分の意思である事は明確だが高い所から「落ちる」ことは事故とも言えるな」

「自殺でも事故死でもない、曖昧だなそういうの。自殺なら誰にも迷惑かけない方法を選べばいいのに」

「一夏、死んだ人を悪く言うのは良くないぞ」

「箒、オレ、お前の一般論は嫌いだ」

「ふっ・・・そういえば最近噂になっている例のアレ、うちの鮮花あねが見たらしい」

「噂？」

「巫条ビルの女の子。空、飛んでいるというやつだ。何週間か前からオフィス街の近くの巫条ビルの屋上に女の子らしき人の姿が・・・という怪談話だが知らないか？」

「ああ、それなら一度と言わず数回見た」

「そうなのか。あの辺はよく通るが私は見たことがないな」

「お前は伊達とはいえ眼鏡かけているから駄目だ」

「・・・眼鏡は関係ないと思うが」

邪気のないこいつの事だ、そういつたモノは見にくいのだろう。

それにしても・・・。

飛ぶだの落ちるだのつまらないコトが続く。

わからないな。

そんな事に何の意味があるんだ。

「なあ箒」

「ん？」

「人が空を飛ぶ理由ってわかるか？」

「飛ぶワケも落ちるワケも分からないよ。だってまだ一度も私はやつ

た事がないからな」

一夏は普段着の着物を着込み、赤い革ジャンを羽織り外に出る。

夜中に散歩することにした。

かつての俺が嗜好していた行為だ。

「……二年前中学二年生への進級が間近だった織斑一夏という俺は交通事故にあつて昏睡状態となった。

雨の日の夜車に撥ねられたらしい。

幸い身体には大きな傷はなかったがつい二ヶ月前、奇跡的に回復するまで目を覚ますことはなかったのだという。

その出来事は俺自身に変化を与えていた。

自分の記憶がどうもおかしいのだ。

自分に確証が持てないというか、自分の記憶に実感が持てない。

二年という空白が、過去の私で今の私を断絶してしまっていた。

今までの記憶を思い出しても、それはまるで、他人事のようにではない。

「……まるで擬態だ、俺はちつとも生きていない。

そうして俺は生きている実感も持てないままかつての私らしい行動を繰り返す。

理由は単純だ。

そうすれば俺は昔の自分に戻れるかもしれないから、こうすればこの夜歩きの意味も解るかもしれないから。

「……ああ、そうか……」

だとすれば俺は……かつての俺に恋しているといえなくもないわけだ。

「……なんだ、今日もいるじゃないか」

「……」

「……」

『あれ……何か夢を見ていた気がする……』

「ん？おはよう箒」

「蒼崎所長……」

「目は覚めたか」

「はい……すみません……事務所で寝てしまっていたみたいです……」
「つまらんことを説明するな、見ればわかる。起きたなら茶を淹れてくれ、いいリハビリになる」

「はあ……『社会復帰？』」

箒がコーヒーをいれ橙子に持ってくる。

「飛び降りも昨日で八人目か……」

「……八人目？」

「君が惚けてる間に増えたんだ。六月に始まって月に三人ずつ、八月

もあと三日だ。あと一人出てもおかしくない」

「・・・『?・・・8月も・・・終わり・・・?』」

「トウゴ、飛び降りには八人で終わりだ。それ以上は続かない」

「わかるのか一夏」

「見てきたから、飛んでるのは八人だった」

「・・・なまじつか飛べちまうと人間ってのはあんな末路迎えちまうモノなのかな」

「どうだろうな、個人差があるから何とも言えないが　　ー　ー　ー　　そもそも人間の力だけで飛行を試み成功したやつはいない。飛行という言葉と墜落という言葉は連結なんだ。しかし、空に憑かれた者ほどその事実が欠落していてね、結果死んだ後も飛行しようとするわけだ。まるで空に墜ちていくように」

「あの・・・すみません全く話が見えないんですけど・・・」

「ああ、いや、例の巫条ビルの話さ。巫条ビルの屋上に出るといふ浮いてる女性の噂は聞いたことがあるだろう。一夏が言うには少女のまわりには人型らしきものが飛行していたそうでね。人型が巫条ビルから離れない、ということからあそこが網になっていたんじゃないかという話を　　ー　　ー　　あ　　ー　　つまり　　だ、巫条ビルの屋上には一人の浮いてる人間がいて、そのまわりには飛び降り自殺をした少女たちの幽霊がいた、話としてはそれだけ単純な構造だよ」

私は話についていけなかったが一つだけ分かったことがある。

またオカルト絡みの事件が起きたのだと。

雨が降り出した。

一夏はレインコートを着て巫条ビル近くの別のビルの屋上にいた。

そして彼は何のためらいもなくビルから飛んだ。

そのままビルからビルへと飛び移り、彼は巫条ビルへと辿り着い

た。

そのまま中へと入る、エレベーターが待っていたかのようにドアが開き一夏を招き入れる。

外部と関わりのない小さな筐。

今はこの中だけが自分を取り巻く世界。

だから、少しだけ、安心する。

かつての俺は、この筐の中では関係がない。

屋上へと辿り着く。

空には少女たちの霊が浮かんでいる。

首元を感じるチリチリとした感覚。

一夏は思った。

「なるほど」　　「……確かに、こいつは魔的だ。なら……殺さなくっちゃなあ！」

<推奨 b g m M 1 2 + M 1 3 >

一夏の目が魔眼としての機能を発揮する。

一夏はレインコートを脱ぎ去り、腰に差していた短剣を抜く。

そのままコンクリートの地面を蹴り、一人殺す。

短剣を逆手に構えなおす。

その眼には死が見えている。

一人、また一人と殺す。

短剣を投げる、また一人殺す。

コンクリートの壁に突き刺さった短剣を引き抜き一夏は駆け出す。

すれ違いざまに一人、一人と斬り、突き刺す。

彼女達は空へと逃げるが一夏は跳躍し手前にいた少女の脳天に短剣を突き刺し殺す。

残った少女は隣のビルへと逃げる。

一夏は何のためらいもなく巫条ビルから跳んだ。
屋上に左手をつき一旦身体を跳ねさせる。
屋上に溜まった雨水を切りながら滑走し止まる。
少女は一夏に指を向け何かをした。
一夏は少しふらついたが踏みとどまった。

「……!？」

「地に足が着いてない……飛んでいるのか？」

「……」

「浮いているのか?……っ」

—————る

—————べる

飛べる、あなたは飛べる

昔から空が好きだった

昨日も飛んだ

今日のもつと ————— 高く飛べる

一夏は踏みとどまる。

————— 飛べる

自由に

安らかに

笑うように

行かなくては

何処に？

空に ーーーー 自由に

ーーーー それは現実からの逃避。
大空への憧れ。

重量の反作用

地に足が着いていない。

無意識化の飛行、

ーーーー 行こう

行こう、

行こう、

行こう、

行こう、

行こう、

行こう、

行こう、

行こう、

行こう、

行こう ーーーー

行け!!

一夏は少し立ち眩む。

「ーーーー 冗談、暗示か？洗脳か？まあいい、お前がどんな手を使つたかは知らないが俺には生きている実感が無いから、いくら「衝動」を起こさせても無駄だ。そんな憧れ、俺の中にはないんだ。ああ、本当はさ、お前の事だつてどうでもいいんだ」

一夏は左腕を伸ばす。

少女の首が突然締まる。

離れているのに左腕で掴まれているみたいだ。

「でも、あいつを連れていかれたままは困る。投げ所にしたのはこっちが先だ」

一夏は左腕を重いつきり引つ張る。

少女はそれに連れられて落ちてくる。

「返してもらうぞ」

ーーーー っ

ーーーー ろ

ーーーー ちろ

落ちろ

落ちろ

落ちろ

落ちろ

落ちろ

落ちろ

落ちろー！

落ちろ！！

落ちろ！！

落ちろっ！！

ザシユツ

「お前が、墜ちろ」

少女は墜ちていく。

崩れ去りながら。

「まるで、骨か、百合だな」

この事件から暫く立ち桜舞い散る春。

桜並木を二人の人物が歩いていた。

一人は長かった黒い美しい髪を少し短く切り、少し前の事件で片目を失った筈。

もう一人は青い着物を着て筈と並んで歩く一夏。

「久しぶりだなお前とこうして並んで歩くのわ」

「ああ・・・懐かしいな、小さい頃こうして並んで歩いてみんなでお花見してたな」

「思い出したのかあの頃の記憶」

「ああ、断片的にだがな。それより急ごう筈、皆が待ってる」

「ああ、そうだな。行こうか、一夏」

君がいて、そばにいてくれるだけで、幸せだった。

二人は一緒に歩み続ける。

この繋がりは誰であろうと切り裂けない。

ガトリング少女の成層圏

中東某所。

「オラオラア！遠慮はいらねえ、持ってけ！」

「ギヤアアアアアアア!?」

「よし！これで仕事終わりだ！」

「ありがとう傭兵、おかげで助かった。報酬はいつもの講座に振り込んでおくよ。しかし、本当に行くのか？我々的にはもう少し欲しかったんだが。まだお礼も済んでいないのに」

「良いんだよお礼なんか、それに今から急いで行かないと学校の入学式に遅れちゃうんでな。それじゃ、また縁があったら会おうぜ！」

「ああ、またな」

その頃、日本のIS学園

「織斑秋羅です！趣味h(長ったらしいのでカット)これからよろしくお願ひします！（くひひひ・・・全員俺の女にしてやるぜ！）」

「織斑冬香です、趣味は読書や料理です。あと自分は男ですので。これからよろしくお願ひします」

「「「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!! 可 愛
いいいいいいいいいいいいいい!!」」」

「神さまありがとう！」

「まさかガチの男の娘に会えるなんて！」

「夏コミのネタは決まったわ！」

「秋羅くーん！写真撮らせてー！」

「……一夏ねーちゃん、助けて（くすん）」

「……何で毎年毎年私が担当するクラスはこんな奴らばかりなんだ……」

「あははは……」

ピリリッ

「む？携帯が、もしもし……お前今まで何処にいた？え？中東某所？今ミサイルに乗って直接向かってる？ちよつと待て何処にだ!?何？教室？……山田先生！それと窓際の生徒！今すぐ窓を開けろ！直ぐにだ！」

「「「???」」」

「早くしろ！どうなっても知らんぞ！」

「「「は、はい！」」」

ー ヒヤッハー！やっぱミサイルサーフィンは最高だなあ！ー

「あんの愚妹はあ……！」

「一夏ねーちゃん……」

「あ、あの織斑先生……？」

「来たぞ……入学式に間に合わずミサイルでこちらに突っ込んでくるこのクラス最後のメンバーが」

「……ほえ？」

その時、盛大な爆発音が聞こえ窓ガラスが震えた。

そこに空いた窓ガラスから飛び込んで来た人影があった。

赤と白のインナースーツと赤と黒の装甲を身に包み3連装の2連ガトリングガンを両手で構えた黒い長髪の少女が飛び込んで来た。

少女は顔を上げると勝気そうな笑顔を見せた。

「やつと着いたぜ久々の日本！そして間に合ったぜIS学園！」

「間に合っていないわこの愚妹が」

「いてっ!? な、何すんだよ姉貴！ いてえじゃねえか！」

「完全に遅刻だバカモノ。早く解除して自己紹介をせんか一夏」

「ちえっー、飛行機乗り遅れて徹夜でミサイルサーフィンして帰って来たのに・・・私は織斑一夏だ、これでも傭兵してる。知ってる奴は雪音一夏で分かるんじゃないか？ ま、これからよろしくな！」

「お前まだ傭兵やってたのか・・・」

「そりゃあんな兄貴がいる家に帰りたくねえし」

「な、な、・・・!? (な、何でアイツがいるんだよ!? 殺す様に亡国機業に依頼したのに!? ちくしょうこうなりや俺が殺してやる!）」

その後何やかんやあつてクラス代表決定戦に。

「・・・負けてしまいましたわね。あんな男に・・・！」

セシリア・オルコットは先程試合を終えて控室にいた。

先程対戦した織斑秋羅が卑怯な脅しをかけて来たため思うように実力を発揮出来ず敗北したのだ。

セシリアは一人泣いていた。

其処に一夏が来た。

「なーにしかけた顔してんだよセシリア」

「一夏さん……情けない所を見せてしまいましたわね……」

「安心しろ、お前の仇は私がつとてやるよ。今回静観するつもりだったがうちの身内のクズ野郎がしでかした事だ、私がケリをつけてやる」

「一夏さん……」

「だから、聞いててくれ、私の歌を」

「……あん？何でテメエが出てくんだよ一夏」

「気が変わったんだよクソ兄貴。テメエがセシリアにした事に私はキレてんだよ」

「ああ？何のことやらさっぱりだ」

「……すつとぼけるってんならそれで構わねえ。けどなあ！セシリアが泣いてるところを見て私は我慢ならねえんだよ！」

「ハッ！やってみるや！出来損ないがあ！」

「Killter Ichavaltron」
銃 爪 にか けた 指 で 夢 を なぞる

<推奨曲 魔弓・イチイバル>

一夏は唄う。

その魂を熱く燃やして唄う。

一夏は両手にクロスボウを構えカタパルトから飛び降り巨大なミサイルを生成しそれに乗り秋羅に突撃する。

秋羅は刀を構えて突っ込むが一夏は慌てず大型ミサイルから飛び降りクロスボウを撃ちまくる。

<QUEEN, s INFERNON>

「HaHa!! さあIt, s show time 火山のよう殺伐R
ain♪」

秋羅は大型ミサイルの爆発に巻き込まれるがSEは大して減っていない。

飛行手段を持っていない一夏はクロスボウをガトリングへと変形させ自分は落ちながら爆炎から離脱してきた秋羅を撃ちまくる。

<BILLION MAIDEN>

「美学…? 破学! 羅刹インストール キレイごとが匂ってんぜ
滅ッ!? Delete&Delete! すがってみろ 心からS
tomp head♪」

「歌いながら戦うとか・・・ふざけてんのかテメエ!」

「ふざけてねえよクソ兄貴!これが私と私のイチイバルだ!もってけ
全快だ!」

<MEGA DEATH PARTY>

アリーナの地面に降り立った一夏はガトリングを撃ちながら腰からミサイルを一斉射する。

秋羅はミサイルを避けようとするがガトリングで進路を塞がれミ

サイルを回避できず全弾直撃する。

だが、これで終わる一夏ではない。

今彼女はキレているのだ。

彼女はイチイバルを変形させ大型ミサイル4発、マルチミサイル16発を展開した固定砲台となり秋羅に向けて全弾発射する。

<MEGA DEATH QUARTET>

大量のミサイルと大型ミサイル、ガトリングによる弾幕が全て命中した秋羅のISは素人が見ても1発修理工場行き確定コースである。

一夏はそんな状態の秋羅に近づき至近距離でガトリングを撃ちまくる。

そのまま1分くらいトリガーを引きっぱなしにしていた。

気が済んだのか気絶した秋羅を放ったらかし自分は出てきたカタパルトに帰っていった。

因みにこの戦いの後彼女について二つ名は「ガトリングガール」だったりする。

マテスト番外編 デュエル・マスターズ！

「おい、一夏。デュエルしろよ」

「唐突だな作者!?!」

「仕方ないね♂」

作者

「燃えろビクトリー!ドラゴンロード」

一夏

「ドラゴン魂(スピリッツ)」

作者

シールド5

手札5

一夏

シールド5

手札5

「デュエマスタート！」

「先行は譲るぜ一夏」

「後悔すんなよ！俺のターン！まずは超天星バルガライゾウをマナに置いて俺はターンエンドだ」

一夏

シールド5

手札4

マナ1

超天星バルガライゾウ

9 マナの自然文明のマナ進化GVのトリプルブレイカードドラゴン。攻撃時に3枚メテオバーンする事でデッキトップを3枚めぐりその中のドラゴンを全て出せる連ドラデッキなら採用したい1枚。

「俺のターン！ドロー！俺はフェアリートラップをマナに置いてターンエンドだ」

作者

シールド5

手札 5

マナ 1

フェアリートラップ

3 マナの自然シールドトリガー。

発動時にデッキトップを1枚めぐりそれをマナに置くかそのカードのコスト以下の相手クリーチャーをマナ送りにするカード。

「俺のターン！ドロー！紅神龍バルガゲイザーをマナに置くぜ！」

紅神龍バルガゲイザー

6 マナの火のドラゴン。

かなり初期の連ドラカード。

進化、非進化を問わず出せるが最近バルガライザーに番を奪われがち。

ちよくちよくリメイクされる。

「呪文！メンデルスゾーン！」

メンデルスゾーン

2 マナのmanaブーストカード
デッキトップを2枚めくりそれがドラゴンなら全てタップしてマ
ナゾーンに、それ以外は墓地に置く強力なカード。
最近高額になりつつあるドラゴンデッキ必須ともいえるカード。

「デッキトップをめくるぜ。・・・2枚ともドラゴンなのでmanaに！」

メガmanaロックドラゴン&リュウセイ・ジ・アースmanaへ。

メガmanaロックドラゴン

6 マナの火のダブルブレイカードドラゴン。

召喚時と攻撃時にmanaのアンタップを封じる超強力ドラゴン。

5 文明全てから1枚ずつ選んでロックするので5文明使いなどの
複数文明使いには天敵ともいえるカード。

案の定大暴れした為殿堂行きに。

二度と殿堂から戻ってくんなクソ野郎↑作者心の叫び

リュウセイ・ジ・アース

6 マナの火と自然の多色ダブルブレイカースピードアタックカード
ドラゴン。

召喚時と手札から捨てられた時にデッキトップをめくりそれを手札に加えるかマナに置くか選べるカード。

ドギラゴン剣（バスター）に繋がられファイナル革命でまた出してそこから速攻で決められる事が多い。

「俺はターンエンドだ」

一夏

シールド5

手札3

マナ4

「俺のターン！ドロー！地獄門デスゲートをマナに置いてターンエンドだ」

作者

シールド5

手札5

マナ2

地獄門デスゲート

6マナの闇のシールドトリガー。

相手のアンタップしているクリーチャーを破壊し破壊したコスト以下のクリーチャーを自分墓地から出せるデーモンハンドの上位互

換。

「おいおいそんなに遅くて大丈夫か？俺のターン！アンタップ&ドロ―！ボルシャックNEXをマナに置いて俺はコツコルピアを召喚！」

ボルシャックNEX

6 マナの火のダブルブレイカードドラゴン。
召喚時デツキからルピアと名のつくカードを場に出せる。
今でもたまに見るデツキでもある。

因みにこれで進化ルピアであるヴァルキリールピアとか引っ張ってこれるのでファイナル革命でプチョヘンザかドギラゴン剣に繋がられる。

コツコルピア

3 マナの火のファイアーバード。
ドラゴンデツキの必須とも言えるカードで初代から活躍し続けるカード。

低コスト雑魚と思うなかれ、ドラゴンの召喚コストを2マナ下げる立派なカード。

これが無ければドラゴンデツキと言えない。

「コッコルピアか。次のターンには8マナ以下のドラゴンが来るな」
「俺はこれでターンエンドだぜ」

一夏

シールド5

手札2

マナ5

フィールド コッコルピア

「なあにこれからがお楽しみさ。俺のターン！ドロー！ドロー！デーモンハンドを置いてターンエンドだ」

作者

シールド5

手札5

マナ3

デーモンハンド

言わずと知れた初代3代シールドトリガー。
簡単に言うとりあえず破壊、以上。

「へっへー。さあ、もつと行くぜー！俺のターン！アンタップ&ドロー！ネオボルシャックドラゴンをマナに置いてコツコルピアで2マナ軽減して5マナでボルメテウスホワイトドラゴンを召喚！」

ネオボルシャックドラゴン

8 マナの火のトリプルブレイカードドラゴン。

かつてはコロコロのプロモカードであり最近たまにリメイクされるカード。

トリプルブレイカー以外に効果は無いが作者には思い出深いカード。

ボルメテウスホワイトドラゴン

言わずと知れた有名ドラゴン。

7 マナの火のダブルブレイカーでブレイクしたシールドを手札に加える代わりに墓地に置くカード。

墓地に置かれてはシールドトリガーも使えない切札勝舞の切り札。

「俺はこれでターンエンド」

一夏

シールド5

手札1

マナ6

フィールド コツコルピア ボルメテウスホワイトドラゴン

「ボルメテウスホワイトか・・・厄介なカードだぜ。俺のターン！ドロー！俺はバルガゲイザーをマナに置きフェアリーライフを発動！」

フェアリーライフ

2マナの自然シールドトリガー。

マナブーストと言えばコレ。

最近ではメンデルスゾーンに出番を奪われつつあるがまだまだ現役である。

「マナを一枚ブーストしてターンエンドだ」

コツコルピアマナへ。

作者

シールド5

手札4

マナ5

「俺のターン！アンタツプ&ドロー！マナチャージはせずボルメテウスホワイトドラゴンでダブルブレイク！」

「チツ・・・！紫電ボルメテウス武者とデーモンハンドは墓地だ」

作者

シールド5↓3

紫電・ボルメテウス・武者ドラゴン

8マナの火のダブルブレイカードドラゴン。

ボルメテウス武者にボルバルザーク紫電の効果を併せ持つカード。

ボルメテウス武者のデメリットが無くなり使いやすくなったがコストが増えた。

「ターンエンドだ」

一夏

シールド5

手札2

マナ6

フィールド コツコルピア ボルメテウスホワイトドラゴン

「早く処理しないとまずいなこりゃ・・・！ドロー！燃える革命ドラゴン
ゴンをマナに置いて黒神龍オドル・ニードルを召喚！」

燃える革命ドギラゴン

7 マナの火のドラゴン

トリプルブレイカーの進化ドラゴンでシールド2枚以下で出すと次のターンまで負けずシールド0枚だと常に無限アンタップを得る革命編の勝太の切り札。

もちろん作者の切り札でもある。

黒神龍オドルニードル

6 マナ闇のシールドトリガードラゴン。

召喚時タップして出し自分に攻撃を強制させるカード。

しかも道連れに出来るので複数枚入れてても便利なカード。

「ターンエンドだ」

作者

シールド3

手札3

マナ6

フィールド オドルニードル

「めんどくさいのを……！俺のターン！アンタップ&ドロロー！ボルバ

ルザーク紫電ドラゴンをマナに置いてターンエンドだ・・・」

一夏

シールド5

手札2

マナ7

フィールド コツコルピア ボルメテウスホワイト

「ここから形勢逆転だ！アンタップ&ドロロー！光牙忍ハヤブサマルをマナに置いてフェアリーライフでマナチャージ！リユウセイ・ジ・アースを召喚！」

再誕の社マナへ。

光牙忍ハヤブサマル

3 マナの光のシノビ。

どのデッキにも合うカードでこいつのニンジャストライクに助けられた人も多いはず。

場に出た時自分のクリーチャーにブロッカーを付与するカード。

3 マナ貯まっていれば使えるので他に光文明を入れてなくても使えるので案の定殿堂入りに。

とりあえず採用しても良いカード。

再誕の社

3 マナな自然呪文。
墓地のカードを2枚までマナに置けるカード。
使い終わったカードを再利用出来る。

「ジ・アースで一枚引いて・・・これは手札に加えるぜ。オドルニードルとジ・アースでシールドをブレイク！」
「ちっ・・・！トリガーは無いぜ」

一夏

シールド5↓2

「ターンエンドだ」

作者

シールド3

手札2

マナ8

フィールド ジ・アース オドルニードル

「アンタップ&ドロロー！オドルニードルが邪魔だな・・・マナチャージはせずに竜星バルガライザーを6マナで召喚！」

竜星バルガライザー

8 マナの火のドラゴン。

ダブルブレイカーでスピードアタッカーの連ドラ要員。

進化ドラゴンが出せなくなったがバルガレイザーよりは幾らか使
いやすが墓地に置けなくなったのでちよつとそこがデメリット。

「ボルメテウスホワイトで攻撃！」

「だがオドルニードルに強制的に攻撃させる！」

「これで良いんだ！バルガライザーで攻撃、する時にデッキトップを
めくるぜ・・・来た、ドラゴン！ボルシヤック大和ドラゴンをバトル
ゾーンに！そしてダブルブレイク！」

作者

シールド3↓1

ボルシヤック大和ドラゴン

火の6 マナドラゴン。

ボルメテウス武者ドラゴンの効果を強化出来るので大体セットで
使われる。

勝舞の切り札。

「ターンエンドだ」

一夏

シールド2

手札5

マナ7

フィールド コツコルピア バルガライザー

「俺のターン！アンタツプ&ドロロー！爆竜デュアルベルフォースをマナに！メンデルスゾーン！」

偽りの王モーツアルト&「修羅」の頂VANベーターベンをマナへ。

爆竜デュアルベルフォース

8 マナの火のドラゴン。

スピードアタッカーのダブルブレイカーだが場に自分のNEXTかXXがいればパワーアタッカー+5000とトリプルブレイカーを得る作者の最初の切り札。

偽りの王モーツアルト

11 マナの火、自然、闇の多色のトリプルブレイカードラゴン。

召喚時ドラゴン以外のクリーチャーを全て破壊しドラゴンの攻撃を封じる龍の王。

「修羅」の頂VANベーターベン

11マナのゼロ文明ドラゴン。

召喚時相手クリーチャーを全て手札に戻し尚且つ相手のコマンドもしくはドラゴンを種族に持つクリーチャーの召喚を封じる。

ゼニス特有のエターナルΩで墓地に行かないため除去は至難の技。ゲームを終わらせかねないカード。

なお過去にナンバーナイン、ドラゴ大王とのコンボによるロックコンボでフルボツコにされた作者。
今もこのコンボは現役である。

「そして龍神へヴィを召喚！」

龍神へヴィ

コスト5の闇のドラゴン。

召喚時自分のクリーチャーを1体破壊し一枚引き相手は1体選んで破壊する便利なカード。

かつては殿堂にいたが帰ってきたカード。
なんでこうゴッド系は左腕が強いかな。

「へヴィを破壊して一枚ドロロー！さあ、選びな！」

「ならコツコルピアを破壊だ！」

「ジ・アースで最後2枚のシールドをブレイク！」

一夏

シールド2↓0

「来た！シールドトリガー！熱血龍バトクロスバトル！」

熱血龍バトクロスバトル

コスト8の火のシールドトリガードラゴン。

場に出た時相手のクリーチャーとバトルする効果を持つが相手ターンに出た時デッキボトムにエンド時に置かれる効果がある。

「バトクロスバトルでジ・アースとバトル！」

「チツ、ジ・アースは破壊される・・・！ターンエンドだ」

「ターンエンド時バトクロスバトルはデッキボトムに送られる」

作者

シールド1

手札3

マナ11

「これが俺のラストターンになるかもな・・・俺のターン！アンタップ＆ドロ・・・！来たぜ俺の切札！まずはフェアリーライフをマナに置き呪文！戦慄のプレリユード！」

戦慄のプレリユード

3 マナのゼロ文明呪文。

次に召喚するゼロ文明クリチャーのコストを最大5軽減するゼロ文明使いなら必ず採用したい一枚。

「これで5マナ下がった……来い！俺の切り札！「戦慄」の頂ベーターベン！」

「戦慄」の頂ベーターベン

10 マナのゼロ文明ドラゴン。

召喚時墓地とマナからドラゴン、又はゼロ文明呪文を3枚まで回収しマナを3枚増やし自身をタップしておく効果を持つ。

更にはタップしている間は自身に攻撃を強制させる擬似ブロッカーにもなり自分のコマンドとドラゴンにエターナルΩを付与させる能力を持つ一夏の切り札。

「効果でマナからバルガライゾウ、墓地から戦慄のプレリユードとボルメテウスホワイトを回収して3マナチャージしてベーターベンをタップするぜ」

「来るか……！あれが！」

「その通り！手札からGゼロで呪文運命を発動！」

運命

10マナのゼロ文明呪文。

場に「戦慄」の頂ベーターベンがいればタダで使えるカード。

デツキから5枚まで引いて相手に3枚選ばせその中のドラゴンを全ての出せるドラゴンデツキなら一枚は入れたいカード。

「デツキから5枚引いてさあ、選べ！」

「なら・・・真ん中と両端だ！」

「ふっふっふっ・・・全てドラゴンだ！」

「しまった・・・!?!」

「さあ、来い！国土無双カイザー「勝×喝」！鬼無双カイザー「勝」！
ジオメテウス無限ドラゴン！」

国土無双カイザー「勝×喝」

8マナの火のドラゴン。

召喚時バトルゾーンの自分のドラゴンの数だけガチンコジャッジして勝つたびに相手のコマンドかパワー7000以下を破壊する単純だが強力な効果である。

鬼無双カイザー「勝」

7マナの火のドラゴン。

攻撃時に負けるか中止するまでガチンコジャッジをし勝つたびに
パワー+6000、ブロッカー破壊、シールドブレイク+1が発動す
る。

勝ち続けたら手がつけられなくなる。

ジオメテウス無限ドラゴン

8マナの火のドラゴン。

攻撃時ブロックされなかったら手札からドラゴンを踏み倒せる単
純だが強い効果。

「バルガライザーでシールドをブレイク！効果でめくるが・・・これは
スクランブルチェンジだからデッキトップに戻す」

「トリガーは無い・・・」

「ターンエンドだ」

一夏

シールド0

手札5

マナ10

フィールド ベートーベン バルガライザー 勝×喝 勝 ジオ
メテウス

「俺のターン！アンタップ&ドロ！・・・一夏よ、褒めてやるよ、ここまで俺が追い詰められたのは久しぶりだ・・・だが！勝つのは俺だ！10マナで呪文！運命！2枚引いてさあ、選べ！」

「なら・・・俺から見て左3枚だ！」

「お返しだぜ！3枚ともドラゴンだ！来い！THE FINALカイザー！ボルバルザークエクス！勝利宣言鬼丸「覇」！」

THE FINALカイザー

10マナの闇のドラゴン。

かつて存在したTHE FINALブレードのクリチャー版。

お互いのシールドを全てブレイクするギャラクシーブレイクを持っている。

作者の最終勝利手段。

ボルバルザークエクス

7マナの火と自然の多色ドラゴン。

召喚時全マナをアンタップする能力を持つ。

案の定めちやくちやループなどに使われたので殿堂行きに。

なおこいつの元カードの無双竜騎ボルバルザークはかつてゲームバランスを崩壊させていたのでプレミアム殿堂に行っている。

勝利宣言（ビクトリーラッシュ） 鬼丸「覇（ヘッド）」

10 マナの火のドラゴン。

スピードアタッカーで攻撃時ガチンコジャッジをし勝ったらエクストラターンを前述の無双竜騎ボルバルザークを彷彿とされるカード。

こいつも暴れまくった為殿堂に。

「エクスの効果で全マナアンタップ！そしてボルバルザークエクス進化！さあ、来い！超竜ヴァルキリアス！」

超竜ヴァルキリアス

9 マナの火の進化ドラゴン。

進化元に種族指定がある。

召喚時マナから進化以外のドラゴンを踏み倒してだせる作者の切り札。

「マナからVANベーターベンをバトルゾーンに！さあ、手札に戻れ！」

「くそッ・・・！あとちよつとだったのに・・・！」

「さあ、終わりだ！行け！ヴァルキリアス！」

「うわああああああああああああ！！！」

「ビクトリー！」

オチ?ねえよんなもん。

オマケ

作者と一夏のデツキレシピ。

作者

超竜ヴァルキリアス

「修羅」の頂VANベーターベン

勝利宣言鬼丸「覇」

THE FINALカイザー

燃える革命ドギラゴン

オーバーキルゼロドラゴン

紫電ボルメテウス武者ドラゴン

爆竜デュアルベルフォース

鬼無双カイザー「勝」

爆竜GENJI XX

紅神龍バルガゲイザー×2

ガイアールRe:

コッコルピア×4

リュウセイ・ジ・アース×2

ボルバルザークエクス

偽りの王ハチャトウリアン
偽りの王モーツアルト
龍神ヘヴィ×2
黒神龍オドルニードル
光牙忍ハヤブサマル
運命
セブンスタワー
再誕の社
フェアリートラップ×2
フェアリーライフ×4
メンデルスゾーン×2
デーモンハンド×2
地獄門デスゲート

一夏

「戦慄」の頂ベーターベン×3
ボルバルザークエクス
紅神龍バルガゲイザー×2
竜星バルガライザー×3
超天星バルガライゾウ×2
国土無双カイザー「勝×喝」
鬼無双カイザー「勝」
コッコルピア×4
メガマナロックドラゴン
リュウセイ・ジ・アース×2
ネオボルシャックドラゴン
ボルメテウスホワイトドラゴン
熱血竜バトクロスバトル

ジオメテウス無限ドラゴン
ボルシヤツクNEX×2
フェアリーライフ×4
セブンスタワー
メンデルスゾーン×2
運命×3
戦慄のプレリユード×3
スクランブルチェンジ

暗黒の星を照らす光

『ひつく・・・ぐすつ・・・誰か・・・うずめを助けてよ・・・』

『どこどこだ？・・・ん？どうしたの君？』

『ふえっ・・・？だ、誰？』

『どうしたの？なんで泣いてるの？』

『ほっとしてよ・・・君には関係ないだろ？』

『泣いてる子がいるのに放っておけるわけないだろ？少し話を聞かせてよ。もしかしたら力になれるかも知れないからさ。俺、織斑一夏！君、名前は？』

『・・・天王星うずめ』

アイツとの最初の出会いはこんなだった。

女神としてプラネテューヌを良くしようと頑張っても中々上手くいかず、逆に国民から石を投げられたり暴言を吐かれたりして・・・そんな日が続いたある日、私は仕事をサボってプラネテューヌ外れの川で泣いていた。

そんな時だ、アイツに出会ったのは。

あの時のアイツはゲームギョウ界に迷い込んで来てしまつて当時はまだ幼かった。

アイツと一緒にイストワールの所に戻りイストワールと喧嘩して、仲直りして、一緒にプラネテューヌの事を良くしていこうと誓つた。

アイツ・・・イチカとは数日間一緒にゲームをして遊んだりして楽しく過ごしたがアイツはゲームギョウ界の住人ではない。

元の世界に帰らなければならなかった。

『イチカ・・・ほんとに帰るのか？もう少しゲームギョウ界にいても良いんじゃないか？』

『うずめ・・・俺もそうしたいけど俺の家族が帰るのを待ってるんだ。』

だから、帰らなきや』

『・・・そうだよな。イチカにも帰るところがあるもんな』

『うずめ・・・こっち向いて』

『ん？どうsんむうつ!?!』

『・・・ぷはっ。俺の気持ち、伝わったか?』

『ふえっ?・・・ほにやにやにや・・・い、いいいきなりにやにを!』

『俺だつてうずめと別れたくないよ!大好きな人と離れたくないよ!でも、帰らなくちゃ。千冬姉や円香が心配してる』

『う、うずめもイチカの事が好き!大好き!だから約束!いつか絶対また会うつて。約束して?』

『ああ、約束だ。絶対に会いに来る!絶対に!』

こうしてイチカは元の世界に帰り俺はイストワールと一緒にプラネテューヌを良くしようと頑張つて来たが・・・今や俺は闇に染まり世界を滅ぼそうとしている。

アイツが見たらどう言うだろうか?

怒るだろうか?呆れるだろうか?

だけど、もう何年も会っていない。

約束を忘れてしまったのでは無いかと思った・・・だが、アイツは再び俺の前に現れた。

また迷い込んで来たみたいだが今度は違う、俺を助ける為に女神となつて。

『助けに来たようずめ。さあ、帰ろう?プラネテューヌに』

『助けに来た?帰ろう?ふざけるな!今更どの面下げて俺の前に現れた!また会おうと約束しておきながら何故今になって来たんだ!ずっと待っていたんだぞ!なのにお前は現れなかった!ずっと、ずっとずっとずっとずっと!お前とまた会えるのを待っていたん

だ！なんで、なんで来なかったんだよ・・・イチカ！』

『ごめんね、うずめ。遅くなった。でも、もう貴方を離さない。絶対に。一人ぼっちにはさせないよううずめ』

『来るな・・・来るなよ！』

『嫌だ、うずめ今いくよ。もう絶対に離さないから』

『来るなって・・・言ってるだろおおおおおお！！』

『私の大好きな人が苦しんでるのに・・・放っておくなんて出来るわけがないでしょうがああああああ！！少しは前みたいに素直になりなさいよ！ばかうずめ！』

女神化したイチカとダークメガミとなった俺の一騎打ち。

ネクストフォームとなったアイツは俺とたった一人で互角に戦った。

いつ終わるかも分からない戦い、だが終わりは唐突に訪れた。

『これでラスト！一閃必中！アンチエイドセイバー！』

『ウオオオオオオオオオオオオオオ！！』

アイツの必殺技が炸裂し俺は倒れた。

変身が解けて落ちていく俺の手を掴み抱きしめるイチカ。

アイツの顔は泣いていた。

なんで泣いているのか、泣きたいのはこっちだよ。

願うならばこのままずっとこの夢を・・・。

ピピピッ！ピピピッ！

ガンッ

「・・・全くうるさいな・・・せつかく人が良い夢見ていた時に・・・」

・・・良いところで最悪のタイミングで目覚ましが鳴った。

俺は眠たい目を擦りながらベッドから降りリビングに向かう。

「おはよう、うずめ。ご飯出来てるよ」

「ああ、おはよう。イチカ」

うちの旦那（仮）が朝食を作っていた。

俺は今は一番幸せだよ、イチカ。

「うーん、やっぱり君の作るご飯は美味しいな」

「そう言われると料理人妙理に尽きるぜ。今日この後教会行くけど来るか？」

「ああ、一緒にいくよ。「オレ」の顔も見たいしね」

「ああ、あっちのうずめか。んじゃ、ご飯食べ終わったら行くか」

「ああ、つと、御馳走様」

「お粗末様でした。じゃあ、片付けは俺がやるから準備してこいよ」

「わかったよ」

一夏とうずめ（くろめ）はプラネテューヌの教会に向かって歩いている。

女神化出来るのだから飛んでいけば良いのだがくろめが歩いていきたいと言ったので歩いている。

「♪」

「久しぶりだな、こうして2人で並んで歩くのは」

「ああ、いつもは飛んでいったからね。たまには歩かないと」

「だな。だけど・・・お客さんだぜ」

バーチャフォレスト近くに家を構えているのでこうして歩いてい
るとしよつちゆうモンスターが襲って来る。

今回はどうやらスライヌの大群の様だ。

一夏は大剣を、くろめはメガホンを構える。

「んじゃ、準備運動といきますか!」

「ああ、やろうか!」

織斑一夏（ブレイヴハート）

うずめ（くろめ）一筋の唯一の男性女神。

今はくろめと一緒に過ごしている。

暗黒星くろめ

ネプテユーン V IIではラスボスであり最終的にうずめとの一騎
打ちで負けたが今作ではネクストフォームを使いネクストブレイヴ
となった一夏のエクゼドライブ「アンチエイドセイバー」で倒され奈
落の底に落ちていくくろめを一夏が救出、その際一夏自身が自分の
シエアをくろめに分け与え消滅寸前だったくろめの存在を確立させ
今に至る。

因みに一夏日く何故くろめが自分の知っているうずめだと分かったのかというと「愛だから」だそう。

マテスト：Reflection 編予告

最初はただ見返したかったから手にした力。

だけど、今はこの力で守りたいものが出来た。

最速で、最短で、まっすぐに、安全な場所まで一直線に。

嘘をついても、間違っているでも、だけど、それでも守りたいものがあつた。

例え世界が違えどもその拳は手を開いて掴み、だれかと繋ぎあう為の拳。

救いたい人がいる。

守りたい世界と今がある。

そのために、今の自分出来る精一杯をする。

悲しみと憎しみで染まった救えなかった過去を救うために。

助けてと泣いて伸ばす手を掴むために

「私は」

「俺は」

「諦めたくない！」

平行世界から来た一夏達。

辿り着いた世界は砕けえぬ闇事件も闇の書のかげらによる事件も起きなかったIFの世界。

この世界の異変を解決するためにこの世界のなのは達と接触する一夏達。

だが、彼女達は攻撃をしかけ話し合う事も出来なかった。

困惑する一夏達、だがそんな彼らに歩み寄るこの世界のヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータと盾の守護獣ザフィーラ。

彼は、彼女はたった2人で孤独な戦いを続けていた。

現れるノイズ達、改造された重機で襲いかかる2人の少女キリエとイリス。

幾多の戦いを経て彼らは真実を知る。

イリスの思惑を、彼女の狙いを、その裏で蠢く闇を。

そして目覚めし絶望。

だが、諦めない限り、終わってしまわない限り、逃げ出さない限り。希望の光は潰えない。

「何で戦うんだ！俺たちは戦う為に来たわけじゃ！」

「そっちに戦う理由が無くても私達にはあるの！」

「あの人の為にもここで、倒れて！」

「アンタらは騙されてるんデス！何で気づかないんデスカ！」

「リインフォース、悪いけど私とあの人の為にも落ちてもらおうで」

「我が主・・・そこまで堕ちてしまわれましたか・・・」

「どうしてもその人の本が必要なの！私の故郷を救う為に！」

「絶対に渡さない、一夏の白夜の書は！」

やがてこの異変は2つの世界を巻き込む巨大な災厄となっていく。
始まる絶望へのカウントダウン。

刻一刻と迫る滅亡へのタイムリミット。

だが、それでも諦めない。

最後の最後まで希望が1%でもあればまだ立てる、まだ唄える、戦える。

やがてその光は一欠けらの希望から大きな希望の光となり彼らの諦めない心が奇跡を起こす！

マテリアルズ・ストラトス番外編

劇場版魔法少女リリカルなのはReflectionコラボ作品

マテリアルズ・ストラトスReflection if

「UNLIMITED FORMULA」

リリカルなのはDetonation公開日より連載スタート！

「救うと決めた。たとえ全てを賭けてでも」

「守りたいもののために戦う。もう誰にも失わせないために」

孤独ひとりじゃない。心を繋いだ絆があるから。

最速で、最短で、まっすぐに、一直線に。

戦姫絶唱シンフォギア ー 君ト言ウ音楽デ尽キル
マデ ー 2話

「遅いな・・・ったく、一体何処で道草食ってるんだか」

私、天羽奏改め衛宮みなみはある人物と待ち合わせの為某大手コー
ヒーチェーン店にいた。

先日の翼とマリア・カデンツァ・イヴのライブでマリアが宣戦
布告してから全く音沙汰が無くこっちは奴らの尻尾を掴めていな
いので一応休暇扱いになっている。

そこで私は弦十郎の旦那にある話をした。

私の知り合いを二課の増援として引き込む事だ。

因みにソイツはある意味私の先輩でもあるんだけど・・・来たか。

「お待たせ戦乙女さん♪」

「戦乙女はやめろセレナ・・・いやベルファスト」

「いやーごめんね？久しぶりの日本だから迷っちゃって」

「なら良いんだが・・・なんか飲むか？」

「んーならちよつと頼んでくるねー。荷物よろしく」

「あいよーって相変わらず重てえなこれ・・・！」

待ち合わせの相手は私と同じ一度死んで蘇った人物、セレナ・カデ
ンツァ・イヴ改めベルファスト・アイシス。

世界中を飛び回る傭兵であり依頼があれば駆けつける。

常に大量の銃火器を持ち歩き腰や脇の辺りに銃を携行している。

死んでから私以上に時間をかけて修行していたらしく年齢も実力
も向こうが上だ。

ただ本人曰く力を貸してくれている英霊はある程度実力が無いと認めてくれないみたいで今でもその全てを貸し与えている訳では無いらしい。

この間連絡した時も愚痴ってたしなアイツ。

「お待ちせー。結構並んでたから遅くなっちゃった」

「大丈夫だ、元々この時間かなり混むし」

「それじゃ、仕事の話をしようか」

「あいよ」

話も終わりコーヒー店から出て路地裏に入った時私達は立ち止まり私はコートの中に隠してた拳銃型の莫耶を、セレナはデザートイグルを取り出しお互いカバーしあうように構えた瞬間、アサルトライフルやショットガンで武装した兵士が取り囲んだ。

「〜!〜!〜!」

『セレナ、コイツらなんて言ってる?』

『付いて来いって言ってますね。多分断つても無理矢理連れて行く気満々ですねコイツら。・・・やります?』

『合図出したら鎖出せ、相手するのも面倒だ』

『りよーかい』

「〜!〜!〜!」

「・・・トレース・オン (ボソツ)」

「〜!」

「今だ!それっ!」

「!?」

「天エルキドゥの鎖!みなみさん!

「あいよ!弾けな!」

合図と同時に私がこつそりトレースしたサバイバルナイフを近くの兵士に投げその隙にセレナが天の鎖をビルの屋上にある柵に向かって射出し固定、セレナにしがみついでに投げたナイフを爆破させて私らは逃げた。

一息ついている所に嫌な音が聞こえた。

「……なあ、この音って」

「……いや、まさかこんな街中でそんな物……うそーん」

「……バツカじゃねーの」

アイツら、街中で戦闘ヘリ持ち出しやがった。

ロケットやらマシンガンを撃たれる前に私がカラドボルグでパイロットをぶち抜き、セレナが鎖で縛ってハンマー投げの要領でヘリをぶん投げた。

ヘリは空中で爆散したが派手に動いたせいで警察が動いていた。

見つかる前にさっさとこの場から痕跡を残さないように去り急いで二課の仮設本部に向かった。

まあ、案の定旦那には怒られたけど。

「……とまあ、色々あったがベルは今日から私らの仲間として加わる」

「よろしくね皆」

「はい！よろしくお願ひしますー！」

「うむ、よろしく頼む」

「よろしく」

「んじゃ、ベル。久々だしちよつと手合わせするか？」

「良いねそれ、やろうか」

「頼むからシユミレータールームを壊すなよ」

「分かってるよ旦那」

私はいつもの干将と莫耶を持ちセレナは右手にP90を、左手に肩掛けのベルトをつけたAA-12フルオートショットガンを持っている。

多分あの2つの銃は魔術による細工がしてあるんだろうなあと私は思いながらいつもの赤原礼装を展開する。

セレナも一部に金の装飾をあしらった礼装を展開する。

「AA-12にドラムマガジンって・・・殺す気満々じゃねえかベル」
「これぐらいしないとアンタには届かないしね。もちろん宝物庫とマガジン繋げてあるから弾薬は無尽蔵にあるわよ」

「殺す気満々じゃねーか。んじゃ、やるか!」

「それじゃ遠慮なく!」

始まると同時にセレナはAA-12をフルオートで撃ちまくる。

それを避けながら私は干将と莫耶を投げて投影、投げるを繰り返しながら駆け抜ける。

投げた干将と莫耶はAA-12の弾丸に撃ち抜かれ全て蜂の巣にされ砕かれたがそれでも私は投影して投げ続ける。

案の定AA-12のバレルがオーバーヒートして煙を吐き出した。

ああなつたらバレルを交換しなければならぬ。

戦闘中にそんな暇がある訳が無いのでセレナはAA-12を放棄し新たにMG36を取り出してP90と共に撃つ。

「ローラー工程完了。全投影、待機」
ゲート・オブ・パビロン
「王の財宝、」
フリーズ
「停止解凍、全投影連続層写！」

お互いの武器が発射され辺りに弾かれた剣や槍、砕けた刃などが飛び散る。

私は干将と莫耶を拳銃型に変えて捉えきれなかった武器を撃ち落とすとして剣を投影し発射し続けた。

宝具が使えれば楽なんだがそれをセレナが許すはずがない。
そんな状況が続くこと数分……。

「ゼエツ……ゼエツ……なあ、ベル……」

「ハアツ……ハアツ……何？」

「そろそろ、アレでケリつけようぜ……」

「そうね……こつちもガス欠気味だし……」

「んじややるか、風鳴の旦那！シンフォギアを使うぞ！」

「ああ、許可しよう」

「許可も出た事だし、やるか！Croitzalronzell
Gungnir zizzl」

「オツケー！やってやろうじゃん！Seilien coffin
airgetlamh tron」

「なにい!?ベル君もシンフォギアを使うだとお!？」

「司令、これを！」

「アガートラームだとお!？」

私はガングニールのギアを赤原礼装と一緒に纏い槍を構え、セレナもアガートラームのギアを礼装と一緒に纏い短剣を両手に持つ。
おっさんはいつも通り驚いてた。

やべっ、風鳴の旦那に伝えるの忘れてた。セレナがシンフォギア装者なの。

「……伝えるの忘れてたでしょ奏さん」

「……後で旦那には謝つとこ。それよりやろうぜ」

「だね。開け、宝物庫！」

「君ト云ウ音、紡ぐ為……」

響達は2人の戦いに釘付けになっていた。

金色のゲートから次々と発射される武器を槍と投影した剣で弾く奏。

武器を発射しながら両手に握る短剣を振るうセレナ。

次元が違いすぎる戦いだが3人は魅了されていた。

戦いの結果はセレナの短剣を奏が弾き飛ばしセレナが武器を取り出す前に首元に槍を突き付けた事で終了した。

その後の2人。

「オラア！」

「ネフィリムが!？」

「姉さん？何テロリストみたいなの事してるの？オシオキダネ」

「せ、セレナ!? な、何で貴方が生きて・・・ってその両手に持つてる武器はなに？い、いやああああああああああ!!」

大暴れしたそうなの。

「ハアツ・・・ハアツ・・・セレナ、もつと踏んで・・・♡」

「・・・姉さんが壊れたんだけど」

「・・・自業自得だバカ」

マテリアルズ・ストラトスDetonation予告

惑星エルトリアからの来訪者イリスと転生者藤木遊矢との激戦を繰り広げる高町なのは達と織斑一夏達。

イリスは自分の復讐を、なのは達は泣いている人を助ける為に、一夏はこの世界の異変を解決する為に。

互いに譲れない正義の為に、願いの為に戦い続ける。

その裏で暗躍する者が現れた時、彼らは、彼女らはその手を取り合
い繋ぎ合う。

「これは復讐なのよ。貴方は私の大切な物を奪った、だから今度は私
が奪ってあげる」

「我らが呼ばれた意味、それが分かった気がする」

「私達の大切な人を助ける為」

「あつたかい居場所をくれた大事な人達を守る為に！」

「もう逃げないって、決めたんだ！」

「私は・・・！貴方達まで失いたくない！」

「たとえ違う世界でも、必ず助ける！失わせはしない！絶対に！」

「お話を聞かせてください！少しは力になれるかも知れませんが
！」

激戦の中、片翼が折れ、地に墜ち倒れた時、もう1人の片翼が、彼の愛する人が舞い降りる。

「全く、無茶しちゃって。イチカらしくないよ？」

「な、なんで・・・どうしてここに・・・？」

「離れ離れだとしても、ボクたちは繋がれている。たとえどんな奴だろうとボクらを引き裂く事は出来ない、それを教えてくれたのはキミだろ？イチカ。片翼じゃ飛べなくても、両翼揃えばどこまでも飛んでいける、2人一緒なら、ボクらは無敵だよ！」

「・・・ああ、そうだな。両翼揃った俺たちは・・・」

「ボク達ツヴァイウィングはどこまでだって飛んでいける！1人じゃ出来なくても」

「2人でならきつと出来る！行くぜ、レヴィ！」

「うん、イチカ！」

― 貫く思いをその両翼に載せて ―

助けてと叫ぶ人がいるなら、救いを求めてその手を伸ばす人がいる
な彼らは絶対に諦めない。

最速で、最短で、真っ直ぐに、一直線に。

行く手を塞ぐ壁があるならば、その全てを貫き、打ち砕く。

胸の歌が響き渡る限り、その魂は砕かれる事はない。

この手で繋いだ手だけが紡ぐ奇跡の力。

正義を握りしめて立つ花を彼は知っているから。

「なんだその力は、君達は一体何を束ねた？その身に纏う力は何だ？
君達は一体何だ!?!何なのだ・・・!?!」

「テメエには一生逆立ちしても分からねえよ!」

「ボク達には胸に響く歌がある!繋ぎ合う旋律がある!」

「魔法をただの道具としか見ていないテメエに魔法を扱う資格はない
!」

「何なんだ君達は!!何故私の計算違いばかり起こる!」

暴走するカルマノイズ、それを打ち倒すべく力を合わせる一夏達。
全ての旋律を束ねた時、奇跡は舞い降りる。

「行こう、レヴィ。両翼揃ったツヴァイウイングなら」

「うん、イチカ。どこまでだって飛んでいける、1人でダメなら」

「2人一緒に飛べばいい。俺たち双翼の奇跡を！」

「双翼の旋律を！」

「全てを込めて！世界中に響け！俺たち（ボクたち）の歌よ！」

マテリアルズ・ストラトスDetonationIF 「双翼の
ウイングビート
撃 槍」

近日連載開始！

マテスト番外：箒主役のXD編「銀腕の鎮魂歌（レクイエム）」 予告編

「ここは・・・何処だ・・・？」

ギヤラルホルンのアラートがなり1人、平行世界へと旅立った箒。降り立った場所はまるで戦争でも起こったかのような荒れ果て、瓦礫だらけになった街。

そこで箒は1人の少女と出会う。

「君の名前は？お父さんとお母さんは？」

「私・・・私の名前は箒、篠ノ之箒」

「!?（わ、私と同じ名前!?待て、よく見たらこの子は小さい頃、小学生くらいの時の私!?ま、まさかこの街は!?!）」

彼女の正体は幼い頃の自分。

証人保護プログラムを受け生まれ育った場所から離れていった時の自分だった。

この瓦礫だらけの街はかつて自分が住んでいた頃の街だったのだ。

「あの、お姉ちゃんの名前は？」

「わ、私はしんいや、天羽一夏だ！」

咄嗟に自分の親友の名前を名乗り彼女と行動を共にする箒。

しかし、本来まだ存在しない箒のノイズが突如現れ彼女達を襲う。

箒は幼い自分を守る為にアガートラームを振るう。

「ねえ、お姉ちゃんは何処から来たの？」

「私か？私は遠い場所から来たんだ。とても遠い場所」

「・・・帰れないの？」

「いや、帰れるさ。私はここに用があつて来たんだ」

彼女を守る為に嘘をつく事に心を炒める箒。

しかし、そんな彼女をあざ笑うかのようにカルマノイズまでもが彼女達に牙を剥く。

「お姉ちゃん！」

「隠れているんだ！大丈夫、お姉ちゃんは強いから！」

たった一人で孤独に戦い続ける箒。

この世界にノイズが、カルマノイズが現れた原因を探すべく前へ進む。

「お姉ちゃんは、好きな人とかいるの？」

「・・・ああ、いたよ。とても、好きだった人が」

「・・・好きだった？」

「振られたんだよ、私は。でも後悔はしていない。箒、もし貴方が好きな人と会えた時の為にお姉ちゃんからアドバイスだ」

「アドバイス？」

「思い通りにならなくても決して暴れたりしない事、自分の気持ちを

精一杯伝える事。これを忘れないでくれよ
「うん！」

しかし、そんな幸せも終わりを告げる。

「この女は君に嘘をついていたんだよ」

「お姉ちゃん？ほんと？」

「違う！私は君の為を思ってる！」

「・・・嘘つくお姉ちゃんなんてキライ！」

「・・・っ！」

幼き自分の言葉が胸に刺さり心が折れる筈。

降り尽くす雨に打たれ冷え切った身体。

自分のして来た事は無駄だと思い知らされる圧倒的な力。

しかし、だとしても、筈は再び立ち上がる。

弱さを認め、何度挫けても立ち上がり続ける大切さを、自分は知っ
ているから。

篠ノ之筈としての彼女の孤独な戦いが、今、始まる！

マテリアルズ・ストラトスI Fギャラルホルン編第1弾！

「銀腕の鎮魂歌」
レクイエム

GOD編終了次第開始！

オモイをマトウ少女と歩む夏

俺は走る、この奥で待つ彼女の元へと。

ギリアムさんが、マリア姐さんが、ヒューイが、クラリスクレイスが、カスラさんが、ゼノさんとエコーさんが、俺を前へと進ませる為に力を貸してくれている。

一度は間違えた、だけど、今度は必ず助けてみせる。

彼女を助ける為に、
「仮面」
オーレとの約束だから。

だから……。

待っていてくれ、マトイ

「……」

「……待たせたな、マトイ」

「……」

「大丈夫だ、俺は君を助けに来たんだ……待っていてくれ、今、助けるから！」

彼女、マトイは深遠なる闇としての力を存分に発揮して攻撃してきた。

俺は手持ちの武器が壊れるまで何度も、何度もマトイを攻撃した。武器ごとに耐性が変わればそれを貫く武器に変え、壊れれば新たな武器で戦った。

だが、とうとう予備の武器が無くなりその隙を突かれ倒れてしまった俺。

俺はアレを使う事を決意した。

「……シャオ、聞こえてるか？」

『なんだい？』

「……創世器を、「界斬剣・雪片」を使う」

『なっ!?だ、ダメだ!ソレはジグにも使うなど言われただろう!ソレを使つてしまつたらキミの命が...!』

「それでも!マトイを、俺の大切な人を助けたいんだ!救うと決めたんだ...今度は間違えない為に!」

『...分かった、無茶はしないでくれよ!創世器、「界斬剣・雪片」の封印を解除!』

「...ありがとな、シャオ。...おい、起きろ雪片。 出番だぞ」

直後、膨大なフォトンの嵐が吹き荒れる。

半年の間、少しずつフォトン溜め込み続けた雪片の封印が解かれていく。

それと同時に俺の体内のフォトンを使い続ける雪片。

創世器 雪片、俺が篠ノ之道場から持ち出した刀がフォトンにより突如変異したかなり特殊な生まれの創世器。

俺が初めてそれを使った時、使用者のフォトンを使い上げ、あらゆるエネルギー物質を斬り裂くある意味危険過ぎる創世器という事が判明して以来封印され続けた剣。

俺はそれを一度ダークファルスルサー【敗者】と戦う際に解放している。

その結果、俺は大量のフォトン吸われ続けた事により数ヶ月の療養と絶対安静となっている。

それ以来、再び封印されていたのだが...その封印を再び解く。

「...封印、解放。 斬り開け、「界斬剣・雪片」!」

雪片...何故だかとても安心する名前だ。

決して負ける事がない、そんな気持ちになる。

俺は雪片を構えてマトイへと向き直す。

「・・・っ！やっぱり・・・キツイなあ・・・！だけど、これなら・・・
キミを救える！」

俺は雪片を構えて駆けだす。

それと同時にマトイも剣を展開して向かってくる。

俺は彼女を助ける為に雪片で斬り裂いた。

大量にチャージされたフォトンの一撃により倒れるマトイ。

それと同時にフォトンを一気に失った事により膝をつく俺。

元の姿に・・・深遠なる闇としての姿になるマトイ。

俺は機能を停止した雪片をその場に刺し、近くに落ちていたソード

NTを拾いマトイへと向ける・・・だが・・・。

俺の脳裏に彼女の笑顔が過ぎる

「・・・ダメだ、彼女を助けるって決めたんだろ俺・・・！」

「・・・」

「マトイ、聞こえてなくても聞いてくれ・・・君を、助けに来た」

「・・・」

俺の声に反応するかの様に剣を向けるマトイ。

俺は目を閉じ、彼女の一撃を受け止めようと・・・。

「・・・ほんと、あなたは・・・イチカは優しすぎだよ・・・」

「・・・え？」

アイツは言っていた、もう彼女の意味は闇に飲み込まれたと。

だが彼女は最後の最後で意識を取り戻したのだ。

「わたしはもう覚悟してたのに……手が、止まっちゃったじゃん。その優しさは、残酷だよ……」

「マトイ……意識が戻ったのか!」

「真っ黒い闇に包まれてた時も、貴方の声は届いてた。だから、出てこられた。これが真正正銘、最後のチャンス。わたしはきちんとやりとげなくちゃ」

「マトイ……何を……?」

「もう、止められない。深遠なる闇はわたしの内に顕現してしまった。でも、今ここでわたしが死ねば深遠なる闇を閉じ込める事ができる。それで終わり、それでおしまい」

「マトイ……」

「だから……優しすぎるあなたにできないなら……わたしが、わたしを……!」

マトイは自ら呼び出したアング・ファンタージに自分を攻撃させて自ら消滅しようとしていた。

だが、そんなことはさせない。

マトイのする事に気付いた俺はボロボロの身体に鞭を打ちマトイの前に飛び出してアング・ファンタージの攻撃を受け止めた。

「ぐうううううう!」

「だ、ダメだよ!イチカ!あなたも巻き込まれちゃう!」

「避けるものか……!絶対に助けるって、決めたんだ!」

「このわからずやっ!邪魔しないで!これはわたしが望んでやっていることなの!わたしは与えられているだけだった。なんで、みんなを守りたいのかその理由さえわからないまま、戦ってた……でも、今

は違う！十年前とは、全然違うの！わたしは自分で考え、自分で思ったの！」

段々と押されていつている俺。

俺は身体の中に残っている全てのフォトンを集中させ受け止める。俺ごとマトイにぶつけるつもりなのかアング・ファンタージが近づいて来ていた。

「みんなを守りたい。みんながいる世界を守りたい。……ううん、そうじゃない。イチカを……あなたをいる世界を、守りたい。あなたを守りたいって。だから、だからね。わたしはなにも……怖くない。なにも怖くなんか、ないんだよ」

アング・ファンタージの攻撃を抑えるのも限界で、大量の闇をその身に受けてしまった俺とマトイ。

そこに……。

「……ならば、なぜ泣く」

「……え？」

そこに現れたのは何故か白錫・クラリツサを持っている【仮面】。

「起きろ、クラリツサ！否、シオンよ！私たちの巡ってきた悠久の輪廻を、ここで終わらせる。そのために……力を貸してくれ」

「……もちろんだ。イチカよ」

【仮面】はクラリツサの力を使い、俺たちの闇をその身に取り込み始めた。

「な、何を……！」

「いくら器に適しているとはいえ貴様らはアークス、私はダークファルス。ならば、ダークファルスである私に闇が集うのは、当然のことだろう？」

「お、おい！どういうことだ！……まさか、最初からこれを……？」

「……貴様が、気づかせてくれた。ただ一人を救いたいという強い意思。それを成し遂げるためにやるべきことを！」

「……【仮面】」

「私は、彼女が救えればそれで十分！……それ以外は、何もいらない！」

全ての闇をその身に引き受ける【仮面】。

マトイは深遠なる闇になる運命から解放された。

俺とマトイは再びシオンと再会した。

その隣には【仮面】が、俺自身がいた。

「……ごめんなさい、ごめんなさいっ！わたしは結局、覚悟なんてできてなかった……。だから、あなたたちを犠牲に……」

「……きみは知らないだろうが、きみと私は、ひとつ約束をした。……泣くな、笑え」

「深遠なる闇は、わたしたちが受け取った。これで、彼女は生き、貴方も生きる。だが、深遠なる闇もまた、消し去ることは出来ていない。……やがて、形を取るだろう。ダークファルスを従え、現れる

新たな深遠なる闇・・・人類の勝つ歴史を、わたしは知らない」

「シオンさん・・・」

「・・・だが、彼女が救われた歴史もわたしは知らなかった。イチカ、いや織斑一夏。ここからは、貴方次第だ。全知の先に、進み新たな歴史を、紡いでくれ。それが、わたしたちの最後の願いだ」

「ああ、分かった。だから、いつまでも見守っていてくれ。俺たち、アークスの行く末を、未来を」

・・・そうして、シオンさんとダークファルスとなった俺は消えていった。

俺たちに、全てを託して。

深遠なる闇・・・デイーオ・ヒューナルとなって消え去った。

「・・・ああいうの、ずるいよね」

「なにがだ？」

「ありがとも言えなかった。さよならだって、言えなかった。ほんつとうに、ずるい。・・・でも、笑えって言われちゃったしわたし、笑ってることにする。泣いてもいいってなるまでは笑うことにする。だってそうでしょ。深遠なる闇が出てくるって言ってたもんね」

「・・・ああ、そうだな」

「わたしたちのせいで出てきちゃったようなものだし・・・わたしたちが、倒さないと！それにダークファルスも来るだろうしダーカーもなんとかしないとだし・・・ああ、いろいろやることたくさん！泣いてる暇なんてないね！ね、イチカ。そうだよね！」

「マトイ・・・」

「あ、あれ？おかしいな？わたし、笑ってるはずなのに・・・お、おかしいな、この、このっ！」

「・・・無理するなよ、泣きたかったら、思い切り泣いても良いんだぜ？」

「ちよつと・・・イチカ。このタイミングでそれはダメだよ、反則だよ・・・ごめん・・・ちよつとごめん・・・約束、守れそうに、ない」

そこにいたのは、ただ一人の少女だった。

何処にでもいる、悲しい時には泣いて、嬉しい時には笑う一人の少女だった。

「おかえり、マトイ」

「・・・ただいま！イチカ！」

こうして、マトイは深遠なる闇としては覚醒せず代わりにシオンと【仮面】が新たな深遠なる闇となった。

たった一人の少女を救うためにアークス全員が一丸となって動いたからこそなし得た奇跡の物語はここでおしまい。

ここから先は、俺たちにも分からない。

「・・・とまあ、これが俺が、俺たちが歩んできた道のりだ」

「・・・なんとというか、その・・・大変だったな。宇宙の危機とか、世界が滅びそうだったとか」

「あはは・・・イチカにも、みんなにもいっばい迷惑かけちゃったね。改めて聴くと」

「「・・・(ついてこれていない幼馴染 s & a m p ; 専用機組と妹)「」」」

「でも、俺はマトイにちよつと怒ってる」

「え？な、なんで？」

「こないだの『若人』が復活しかけた事件、カスラとアイカに聞いたぞ？まーた無茶したんだって？」

「・・・え、えーと、そのー・・・ごめんさい！」

「・・・全く・・・今回はアイツがまた闇を取り込んでくれたお陰で無事だったものの・・・また深遠なる闇になりかけたらアイツに合わせる顔がねえよ」

「・・・そう、だよね・・・ごめんね？」

「だけど、無事ならそれで大丈夫だ。今はゆっくり休もうぜ。久々に俺の住んでいた家に帰って来たんだし・・・」

「そうだね、シャオくんやシエラちゃんには悪いけど・・・アークスとしての活動は少しお休み、今はゆっくり休もうか」

イチカ

本名：織斑一夏。

クラス：ブレイバー／ハンター（のちにメインクラスをフロントムにクラス換え）

使用武器：皇剣・雪羅／界斬剣・雪片（現在封印中）

年齢：18歳（EP4終了時点）

服装：

ベース、ビターシームーン（Ba）

アウター、ジェンダーピラウトM (Ou)

インナー、フロワガロウズ (In)

色は白メインの黒がアクセント。

設定

現在、アークス内でもトップクラスの實力を誇る「ガーディアン守護騎士」。

8歳のころ、突如オラクル船団に転移しそのまま10年間をオラクル船団で過ごし、彼が14歳の頃からアークスとして過ごしている為、実を言うとアフィンより先輩である。

(一応教官としてアフィンと同行していて年も近かった為アフィンからは相棒と呼ばれている)

常に最前線で活躍し続けており、元六芒均衡の面々ですら一目置いている。

現在は地球での問題解決の後に貰った休暇で12年ぶりに自分の世界の実家に戻っている。

10年ぶりではないのは深遠なる闇との戦いの後に2年間、ダーカー因子の浄化のためにコールドスリープをしていた為である。

界斬剣・雪片に関しては再びジグにより封印が施され、現在は新たなマトイの新しい創世器であるクラリツサⅢとともにジグが制作した創世器、皇剣・雪羅を使用している。

なお、マトイは嫁である (本人談)。

皇剣・雪羅

ジグの手により新たに制作されたイチカ専用の新しい創世器。

性能的には界斬剣・雪片の性能の一部を受け継ぎつつ最大のデメリットであった大量のフォトン吸収を体内からではなく大気中から吸収するようになった事で使用者に負担が掛からないようになってくる。

しかし、その代償としてあらゆるエネルギー物質を斬り裂く機能は失われてしまう。

だが、ジグの努力の賜物により斬り裂くのではなく、エネルギー物質を吸収しそれを刀身に纏わせてより切れ味を増すという機能が追加されている。

見た目としては雪片式式の刀身が淡く白く光り輝き、鞘自体に蒼いクリスタル状のパーツと鏢と柄自体がまるでマザーシップを思わせる作りとなっている。

オモイをマトウ少女と歩む夏 2

俺の世界の地球の実家で休暇を始めて早数日、俺とマトイは出かけていた。

どうやら円香達も夏休みだったようでショッピングに誘われたのだ。

しかし、集合場所についても誰もいなかった。

どうも早く着きすぎてしまったらしい。

※今日の2人のファッション

マトイ：ボアジャケットスタイル一式（白メインカラー）

一夏：ジャケット無しのストライプジャケットスタイル一式（白メインカラー）

「しまったなあ・・・マトイ、どうする？」

「うーん・・・あつ、あそこにカフェがあるよ。あそこで待とうよ」

「そうするか。シエラに幾らかお金は用意してもらったし」

（頑張りました！ブイッ！byシエラ）

俺はコーヒーを、マトイはカフェオレとパフェを注文して待っていると運ばれて来たので食べながら円香達が来るのを待つ。

マトイが嬉しそうにパフェを頬張っているのを見て思わずニヤけそうになるのを抑えていた。

そうしていると円香達がやって来た。

「ご、ごめん兄さん！電車が遅れちゃって・・・」

「気にするなよ円香。待つのは慣れてるし」

「てかどうしたのよ一夏その服」

「ああ、これか？何着か持って来ててるんだよ。こないだのは戦闘用だ

「からな」

「わたしは気にしないのにイチカが露出多過ぎだから着替えてっ
うから・・・」

「アレは流石にダメだろ街中出るのに」

「二二(それには同意)二三」

「だがどうやって持ち込んだんだ？」

「ん？俺たちアークスはアイテムパックあるから持ってこれるぞ？」

「な、成る程・・・」

「さてと、俺は会計してくるからマトイは円香達と一緒に居てくれ」

「うん、わかった」

わたしは一足先に円香ちゃん達と共に外に出てイチカを待ってた。
そしたら円香ちゃんのお友達が話しかけて来た。

「あの、マトイさんだっけ？」

「あなたは・・・確か鈴ちゃんだっけ。わたしになにか用？」

「単刀直入に聞きます、貴方は一夏の事をどう思っているんですか？」

「イチカをどう思っているか、かあ・・・。わたしの大切な人で、大好きな人で、守りたい人、かな？」

「守りたい人？」

「わたしね、実は深遠なる闇の依り代になる前は記憶を失ってたんだ」
「二二!？」」

「私がかつて2代目クラリスクレイスとしてダーカーを殺してた。そんな日々を過ごしたある日、あの人が、イチカが現れたの」

「一夏が？」

「うん。まあ、その時のわたしはダーカーと勘違いしてテクニクを使おうとしてただけだね。それからわたしはイチカと色んな場所
で出会ってお話をした。ナベリウスの森の中、リリーパの採掘場、ナベリウス壊世区域。色んな場所。でも、わたしにとってはあの時か

なあ」

「あの時？」

「・・・実は私が2代目クラリスクレイスとして活躍してたのは12年前なの」

「「「ええっ!?!」」」

「え?でもマトイさんの年齢って・・・」

「・・・あの時、ダークファルス【若人】を倒した後に仮面を被った謎の人ーダークファルスとなったあの人に刺されたんだ。あの頃のあの人は殺す事でしか私を救えないと思ってたみたい。その時、駆けつけてくれたのがクラリツサを持って来てたイチカだったの」

「ちよ、ちよっと待つてください!確か一夏がそちらに行ったのはその頃じゃ・・・」

「あとでシャオくんといチカから教えてもらったんだけど、どうやらシオンさんが消したわたしの過去を調べるために時間を逆行して来てたらしいの。それで、ダークファルスに成りかけてたわたしはクラリツサに祈った。わたしを消してと」

「けどマトイさんはここにいますよ」

「実はその時の事はよく覚えてないんだけど、わたしは10年後の未来に記憶を失って来た。その時に会ったのが・・・」

「一夏、というわけですか」

「二応その時が初めてわたしが会ったイチカだったかな。ほんととは2回目の初めましてなんだけどね。そこからは色々あったなあ・・・【敗者】と戦ったり、シオンさんとお別れしたり、【双子】に囚われたり、そして深遠なる闇の依り代になったり。でも、あの人やみんなが助けてくれたから今のわたしがいる。2代目クラリスクレイスとしての記憶も蘇ったけど、今は3代目のクラリスクレイスがいるからわたしはクラリスクレイスじゃなくてマトイ。クラリツサはもう無いけどこの明錫・クラリツサⅢがあるからわたしはあの人の側であの人を支え続けるよ」

「・・・貴方がアイツの事をどう思っているかはよく分かりました。・・・アイツのこと、よろしくお願いします」

「うん、任せて」

「ごめんおまたせ。レジが混んでてな・・・」

「遅いわよ一夏。・・・マトイさんのこと、悲しませるんじゃないわよ？」

「なに言ってるんだよ。そんなの当たり前だろ？」

「なら、よし」

マトイ

クラス：フォース／テクター

衣装：イノセントクラスター

武器：明錫・クラリツサⅢ

年齢：18才（EP4終了時点）

設定

イチカとともに最前線で活躍している「守護騎士」。

その正体はシオンにより生み出された2代目クラリスクレイスでありかつては六芒均衡に所属していた。

しかし、12年前に【若人】と激突した際に【仮面】により殺害されそうになるがイチカが寸でのところで間に合う。

しかし、今まで喰らってきたダーカーの力が暴走を始め一度、深遠なる闇に成りかけていたがクラリツサに願い消滅した、かに見えたが実は10年後の未来に記憶を失い来ていた。

その後は様々な別れと出会いを繰り返していたが惑星ハルコタン

で瀕死のダークファルス【双子】の攻撃から庇い深遠なる闇に成りかけたイチカから全ての闇を引き受けて深遠なる闇として覚醒。

その後、ナベリウス壊世区域にてイチカと【仮面】、クラリツサに宿っていたシオンの残滓により助け出され奇跡の生還を果たす。

その後深遠なる闇との戦いでコールドスリープに入っていたがイチカより先に目覚め活動。

その際蘇りそうになった【若人】の復活を阻止しようとしたアイカから闇を全て引き受けようとしたが現れたディーオ・ヒューナルにより闇を吸収され再びコールドスリープに入っている。

現在は3代目クラリスクレイスやかつて自分が助けたサラに慕われたり前線に出られず書類仕事をしていてその文句を言ったりしている。

イチカのこととは誰よりも守りたい大切に大好きな人。

明錫・クラリツサⅢ

ジグがマトイの為に作り上げた新たな創世器。

今まで使っていた白錫・クラリツサが消滅してしまった為今の彼女はこれを使用している。

アニメ版ではなぜか単体で浮かんでテクニックを使用していた。

最初のクラリツサもそんな感じで浮かんでいた時もあるにはあったが。

オモイをマトウ少女と歩む夏 3

休日前のある日、俺は一人でクエストに行っていた。

マトイはメデイカルセンターでの定期検診（本人はメデイカルセンターが大嫌いで昔はしょっちゅう抜け出していた。今でも嫌いらしく定期検診の日は目に見えて不貞腐れた顔をしている）に行っている。

いつものように愛刀でダーカーや襲いかかってくる原生生物達を斬り倒しながら惑星ナベリウスの森林エリアを進んでいく。

しばらく行くとテクニツクの爆発音が響いていた。

音の発生源に行くと危うく丸焦げになりかけた。

犯人は・・・予想通り紅い髪をして猫耳みたいな髪型の少女、3代目クラリスクレイスことイリスだ。

「おい、あぶねーなクラリスクレイス」

「む？なんだ貴様か。貴様もここで任務か？」

「まあ、そういうことだ。お前もか？」

「まあな！私だってちゃんとする時は仕事をするんだぞ！」

「普段はサボってるって事じゃねーかそれ」

「まあ、そーともいう！」

「見つけたわよバカリツサ！どんだけ奥まで進んでるのよ！」

「あつ！サラ！って誰がバカリツサだ誰が！」

クラリスクレイスと話していると後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

クラリスクレイスと同じデザインの色違いの衣装を着て銀混じりの黒髪の少女でありクラリスクレイスと瓜二つでワイヤードランス使いのサラだ。

「あら、貴方もいたの？」

「ああ、クエストで来たたらまたまクラリスクレイスと会ってな。危うく丸焦げになるとこだったわ」

「急に出てくるのが悪い」

「全く・・・だからつていきなりテクニックを使わないのバカリッサ」

「あー！また言ったー！私はもう怒ったぞサラー！」

「良いわよ、やるってんなら付き合っただけあげるわ！」

「・・・喧嘩なら巻き込まないでくれよ」

いつも通り2人の姉妹喧嘩が始まったので離れる俺。

2人が出会うといつもこうなる。

マリアさんかヒューイがいれば止めるのが楽なんだが・・・あつ、たまたま近くに来てたアフィンが巻き込まれた。

(なんでさー！byアフィン)

「ちよつと、アレ止めなさいよ」

「無茶言わないでくださいよユクリータさん」

「良い迷惑なんだけどほんとに」

「死ぬかと思った・・・」

「あつ、生きてた」

「ビデエぞ相棒！それにユク姉まで！」

「だってアンタ、私が【若人】だった時にコイツの一撃喰らってもピンピンしてたじゃない」

「とりあえずこれでも飲んでけアフィン」

「最近相棒が冷たい」

「気にすんな」

「いつもいつもとりあえず爆発させて！後始末するこっちの身にもなりなさいよお子様！」

「誰がお子様だ！見た目はサラも変わらないだろうが！」

「少なくとも心は大人よ私は！」

「・・・さすがに止めるか」

「・・・付き合おうわ」

「・・・すみません」

「そのかわり今度何か奢りなさいよ」

「はいはい」

「俺は無視かい」

俺とユクリータさんはテクニクの爆発とワイヤードランスの広範囲攻撃の中を突貫した。

アフィンは置いてきた、この喧嘩について来れそうにない。

「それじゃ、また後でねイチカ。ちゃんとご飯奢りなさいよ」

「わかってますよユクリータさん」

「ううー・・・！」

「少しは反省しろ似た者姉妹」

「誰が姉妹だ！（よー）」

「2人同時に言ってるじゃねーか・・・」

「む？　そういえば貴様、先代はどうした？」

「そういえばそうね、どうしたのよ？」

「いつもの定期検診。しかめっ面で行ったよマトイなら」

「・・・あー」

その頃のマトイ。

「うー・・・検診いやー！　イチカと一緒にクエスト行きたーい！」

「我慢してくださいマトイさん！シャオさんから貴方が無茶してないかチェックもするように言われてるんですから！」

「むー・・・」

「それより、貴方もクエスト中でしょ？ 私たちも手伝うわ」

「良いのか？」

「大丈夫よ、どーせ帰っても書類見てまた爆発させるわよこのお子様は」

「お子様言うなー！」

「煽るなよサラ。手伝ってくれるならありがたい、行くか」

「ええ、行きましょ」

「おー！」

ナベリウス森林エリアの再奥であるエリア3、俺はそこにいるファングバンシーの討伐依頼を受けていた。

しかし、そこにいたのは・・・。

「なんでダークラグネがいるかなあ!？」

「ちよつと！アンタなんのクエスト受けたのよ！」

「ちゃんとファングバンシー討伐クエストだよ！こんなん予想外だ！」

「周りのお供のダーカーが多過ぎるぞ！」

「テクニク使ってぶつ飛ばしちまえクラリスクレイス！」

何故かいたのはダークラグネだった。

討伐対象のファングバンシーは奥で絶命していた。

どうやらダークラグネが倒して喰らっていたようだ。

俺はダークラグネが放つ赤黒い落雷を回避しながら雪羅でダークラグネを斬り裂く。

サラもワイヤードランスで斬り結ぶが決定打になっておらず手こずっている。

クラリスクレイスは周りの雑魚をぶっ飛ばしている。

俺は途中から雪羅をコートエッジに交換して飛び上がりダークラグネの脳天にぶっ刺した。

ダークラグネは悲鳴をあげるがそこにサラとクラリスクレイスの連携攻撃が直撃、ダークラグネは消滅した。

「お疲れ様、サラ、クラリスクレイス」

「お疲れ様」

「私に掛ければこの程度ラクシヨード！」

「さて、俺はこの事を報告してくる。お前らはどうする？」

「私も戻るわ。この子が爆発させた後始末があるから」

「・・・おい」

「・・・響け、響け、Heartよ〜♪」

「クラリスクレイス」

「な、なんだ貴様？」

「この事はヒューイに伝えとく」

「そ、それだけはやめてくれー！」

「ほら、行くわよ」

「やーだー！はーなーせー！」

「やれやれ、さて俺も行くかねー」

因みにこの後イチカとマトイのマイルームにはマトイが大好きな花が2輪、置かれていた。

マトイは不思議そうに見ていたが誰がやったのか見当がついたイ
チカは微笑んでいた。

オモイをマトウ少女と歩む夏 4

オメガでダークファルスペルソナから深遠なる闇と同等の闇を受け深遠なる闇になりかけて【仮面】の力を借りてついでに【仮面】も深遠なる闇から引っこ抜いて闇を2人がかりで抑え込んで半分深遠なる闇の依り代、半分アークスというよく分からないものになりオメガの事件を終わらせて終の女神と終の艦隊からの襲撃を受けてから数日、惑星ナベリウスを目指している俺たち。

俺は深遠なる闇の半分依り代になってる影響で髪の一部の色素が変化、服も色々変わった(シャオに色々改造して貰った)し目も片側だけ虹彩が深遠なる闇みたいになったが特に問題もなかった俺はシヨップエリアを歩いていた。

愛用の創世器、雪羅もなんか黒く染まってるし周りの視線が気になるけど俺は気にしない。

ただマトイがめっちゃくちや怒っててしばらく俺はシエラから出撃禁止令が出されている。

(まあ、終の女神シバの襲撃時には出てなかったから行ってたんだが)んで、後ろからなんか付いてきてる。

「なんで俺に付いてきてるんだ? マル」

「良いじゃない、久々の生身の身体なんですもの。それに、貴方が普段何をしているのか気になるし」

「・・・まあ、いっか。でも退屈だと思っぞ?」

「気にしないわ」

「なら良いけど・・・ん? アレは・・・ゲツテムハルトとメルランディアア?」

「ああ、確か【巨躯】の依り代の・・・何してるの?」

ゲツテムハルトとメルランディアアが何か話していたのでこっそり

聞き耳をたてる俺たち。

「・・・すまなかつたなディア。今までお前を一人にしてよ」

「いえ、私は大丈夫です。再び貴方と会えたのならそれで十分です
ゲッツテムハルト様・・・！」

「・・・これ以上はやめとくか」

「そうね、人の恋路を邪魔したらフアングバンシーに蹴られるとも言
うしね」

「それを言うなら馬に蹴られるだろ」

俺たちはゲッツテムハルトが気づかないうちにその場を離れた。

離れた後聞き覚えのある先輩の声と殴り合う音が聞こえたが無視
した。

ちなみにダークファルスの依り代だったコイツらが出てきてる理
由は俺が深遠なる闇の依り代になった時になんか追い出されたらし
い。

まあ、アイツらのダークブラストは問題なく使えるから良いけど。
そのままショップエリアを歩いていると聞き覚えのある声が聞こ
えた。

マルガレータと一緒に行的と【双子】の依り代だったフラウ
とフローが千冬姉　ー　ある事件がキツカケでアークスになった
ーと【仮面】ー　今は黒夏と名乗っている　ー　を盾にしてマトイ
と睨み合っていた。

・・・何してんのマトイ、しかもクラリツサまで構えて。

野次馬出来てるし・・・あ、ラヴェールさんとリサさんが攻撃しよ
うとしてイオとアザナミさんに止められてる。

「……アレ、止めなくて良いの？」

「……頭痛い」

「あつ！イチカだー！こっちきてー！」

「ほんとだイチカだー！こっちきてよ！」

「……ほら、呼んでるわよあの子たち」

「……ちくしょう」

【双子】に呼ばれて仕方なく俺は5人の元に向かった。

野次馬は俺が来ると不思議と道を開けた。

「……で？なんでマトイはクラリツサをフローとフラウに向けてんだ？」

「だってこの子たち……！」

「ダークファルスだからって理由は無しだぞ？アイツらは監視付きとはいえ問題無しって言われてんだから」

「違うの！この子たちがわたしのケーキとパフェを持って行って食べちゃったのー！」

「美味しかった！」

「甘かったよ！」

「何してんだお前ら」

俺は【双子】にゲンコツを落とした。

「いったーいー！」

「勝手に人のものを持っていくな。食べたかったならちゃんとしてやるから。ほら、マトイに謝りなさい」

「ごめんなさい……」

「すまん、マトイ。これで許してやってくれ」

「貴方がそう言うなら……」

「ほらほら、見世物じゃねえんだから散った散った！」

「はあっ……やつと片付いた」

「すまない一夏。助かった」

「たまたま散歩してたからな、出撃停止中で暇だったんだ。それよりなんで【仮面】がここに？」

「私も偶々ここにいた所に姉さんが来てあの双子に捕まったんだ」

「私は巻き添えだ」

「……お疲れ」

その頃のルーサー

「ふむ、意外と楽しいものだね。こういうのも」

「喋る暇があるなら手を動かさなさいルーサー。貴方達のせいで大量にやる必要のない書類が増えたんですから」

カスラと一緒に書類仕事中。

クロカ

本名：織斑黒夏（一夏）

クラス：ハンター／ファントム

使用武器：コートエッジD

年齢：本人曰く覚えていないとの事で18才

服装：ペルソナミラージュ（PSO2本編には存在しない本作のみのシャオのオリジナル衣服）

設定

元ダークファルス【仮面】であり元深遠なる闇の依り代。

異世界オメガにてダークファルスペルソナとの戦いの最中に一夏により解放された。

何故か女性となってしまうているが本人は気にしておらず「見分けるのが楽で良いだろう？」と言っている。

織斑一夏と同一人物でマトイを救う為にダークファルスとなり何度も時間逆行を繰り返し続けていた。

最終的に一夏と協力しマトイを救うが深遠なる闇となってしまう。助け出された今は大体ショップエリアにいるかフランカ，スカフェで休んでいる。

― CADENZAの姉妹の妹の夏 ―

私は小さい頃、ある施設で育っていた。

私の大切な家族である姉2人と私のもう2人のお姉ちゃん、5人とも仲良く一緒にいた。

お母さんとお父さんがいないのは寂しかったけどお姉ちゃん達と一緒になら寂しさなんて感じなかった。

でもあの日の惨劇が全てを変えてしまった。

私はうさぎのお姉さん ― 篠ノ之束 ― に研究所から連れ出され織斑千冬の妹として生きていた。

けど、中学生のあの日。

私は運命の再会を果たす。

「ここ、何処だろう・・・早くしないと試合始まっちゃう・・・」
「何処だろう・・・早く行かなきゃステージ始まっちゃう・・・」
「ん?」

私は千冬姉の試合を見るためにドイツに一緒に来ていたけど会場で迷ってしまった。

ある角を曲がったところでとんでもない人と遭遇した。

あの超有名アイドルであるセレナ・カデンツアヴナ・イヴと遭遇した。

でも何故だろう、私はこの人を知っている気がする。

いいや、違う。

知っているんじゃない、私の大切な家族だ!

「え？い、イチカ・・・なの!？」

「せ、セレナ姉sっ!? あ、頭が・・・痛い・・・!？」

「イチカ!? 大丈夫!? だ、誰か!」

「思い・・・出した・・・! なんて私は忘れてたんだろう・・・私の大切な家族の事を・・・! セレナ姉さん!!」

「わっ、ちよっ!? イチカ!? 大丈夫なの?」

「セレナ姉さん! セレナ姉さん!」

「・・・久しぶり、イチカ。また会えたね」

「うん、うん!」

「セレナ! もう、遅かったから探し・・・に・・・!?! 嘘・・・!?! イチカ・・・なの・・・!?!」

「マリア姉さん! マリア姉さん!!」

「わぷっ!?!・・・もう、泣き虫さんねイチカ・・・おかえりなさい」

「うん、ただいま!」

こうして私は大切な家族と再会したのだった。

因みに千冬姉はいつのまにか勝ってました。

この後色々ブチギレた千冬姉が束さんを半殺しにしに行ってたけど私は久しぶりに会えた姉さん達に甘えていた。

ママもまだ元気だったけど私はあの2人がいない事に気付いた。

「ねえ、ママ」

「どうしましたか? イチカ」

「きりねえとしらねえは? 一緒じゃないの?」

「っ!?! あの2人は・・・!」

「?」

「・・・ママ、それは私から話すわ」

「マリア姉さん？」

「・・・こつちに来なさいイチカ」

「う、うん」

私がマリア姉さんについていくとそこにはきりねえとしらねえの
写真があった。

それだけで私は全てを察してしまった。

あの2人は、私の大好きな2人のお姉ちゃんはもうこの世には居な
いのだと。

「きりねえ、しらねえ・・・」

「・・・2人はセレナを庇って天井の崩落に巻き込まれて・・・ごめん
なさい・・・！私は2人を・・・！」

「マリア姉さん・・・」

「イチカ・・・」

「セレナ姉さん・・・」

「切歌さんと調さんから貴方に最後の贈り物と言葉があるの・・・これ」

セレナ姉さんから渡されたのは赤い結晶のペンダントと手紙。

若干煤けているけど中身を取り出して私は読んだ。

『イチカへ

ス
これを見てる時はもしかしたら私たちは居ないかも知れないデ
ス

でも心配する事は無いデス。たとえ私たちが居なくなっても私

達

はずつとイチカと一緒です。

マリアとセレナの事を頼んだですよ

切歌

イチカへ

泣かないでねイチカ。私たちはイチカの側にいる。見えなくても

つと私たちの心は繋がってるから。

お姉ちゃん達からの約束だよ

調』

私は涙が止まらなかった。

しらねーちゃんに泣かないでって言われたけどこんな反則な事を書かれたら誰だって泣いちゃうに決まっている。

「最後に2人からの伝言、『悲しまないでイチカ。私たちの分まで生きて。それが私たちの最後のお願いだから』：：そう言つて2人は：：！」

「大丈夫だよセレナ姉さん」

「イチカ？」

「私は生きるよ。お姉ちゃん達からの約束だから：：けど、しばらく1人にして欲しいかな・・・」

「分かった・・・」

私は2人の写真の前で泣き続けた。

1〜2時間くらい泣いて、泣いて、泣きじゃくって私はようやく涙を拭いて改めて2人に約束した。

私は生きるよ、2人の分まで精一杯生きて、生きて、生き抜いてこ

う言ってやるんだ。

私は世界で一番幸せで最高なお姉ちゃんを持ったって。

そして今の私は。

「デスデスデース！」

「マリア姉さん！そっち行ったよ！」

「任せなさいセレナ！」

私はマリア姉さんとセレナ姉さんと一緒にノイズと戦っている。

2人が遺してくれたこの「Z A B A B A」でこの世界を守るんだと。

そしてあの日、私にとって2度目の出会いと再会が起きるのだった。

「うそ．．．きりねえ、しらねえ？」

「イガリマとシュルシャガナが2つで1つになってるデス!？」

「マリアとセレナの妹．．．?」

再会する2つのZ A B A B A。

この再会がもたらすのは一体何か。

※要望があれば設定ガチでねって製作します。

青薔薇に恋する操縦者

『なあ、ゆきな！また歌ってよ！』

『いちかってほんとにゆきな歌すきだよね』

『だって歌ってるゆきなってすぐくカッコいいんだもん！』

『わたしもゆきな歌はすきだ』

『わかった。いつものでいい？』

『うん！』

「・・・懐かしい夢を見たな」

色んな事件を経験し、その全てを解決して進級した3年生の夏休みのある日、IS学園の自室で起きた一夏。

昔、自分のファースト幼馴染みと共に幼少期を過ごした2人の幼馴染み。

よく一緒に歌を歌っていた、その時の事を夢に見ていた。

「久しぶりにギターでも弾きにどっかのスタジオ行くかな・・・。外出届出さなきや」

愛用のギターをケースに入れて外出届を寮長である姉に出し出かける一夏。

ポケットのiPodにヘッドホンを接続しお気に入りの音楽を流しながら歩いている彼の後ろにはストーカー紛いの事をしている5人の少女がいた。

「二夏の奴、一体何処にいつてるのかしら？あんなでかいケースなん

か持って」

「アレは・・・ギターケースか？」

「一夏さんギター弾けるのですか？」

「アイツは昔から弾いてたぞ。私と一夏、共通の幼馴染みと一緒に」
「何それ私知らない」

「そりゃ私と一夏が小学3年生の時に引っ越したからな・・・知らない
のも訳はない」

「それより見失うよ？」

「急ぐぞ」

一夏はある場所に向かって歩いていった。

最近ネットで噂のライブハウスに向かっているのだ。

そのライブハウスの名前は「CiRCLE」。

今話題のガールズバンド達がよく利用しており表にはテラス付き
のカフェまである。

勿論機材もしっかりと揃っている。

たまにはゆっくりギターを弾きたいと思っていたのでこれ幸いと
思った。

そして目的の場所に着き中に入る。

「いらっしやいませ！CiRCLEによろこそ！」

「すみません、1人用のスタジオっておりますか？初めてなんです
が・・・」

「ご新規さまですね？ではこちらにどうぞ」

「ありがとうございます・・・ん？歌？誰かバンドしてるんですか？」

「ああ、今下でRoseliaが練習してるのよ。見てみる？」

「お願いします（なんか聞き覚えのある声だったな・・・）」

下のスタジオに降りた一夏は壇上で歌っている人物を見て固まった。

そこに立っていたのは忘れもしない9年ぶりに見る幼馴染みの姿。あの頃と変わらない凛々しい歌う姿、綺麗な銀髪。成長して昔より凛々しくなった様に感じる顔つき。そして、ずっと大好きな人・・・湊友希那だった。

「ふう、お疲れ様。少し休憩にしましょう?」

「ええ、そうしましょう」

「ん?あれ?誰か見てる?」

「あ、スタッフさんだ。あれ?隣に誰かいる?」

「ごめんなさいね?新しく来た人が貴方達の練習風景を見たいって」

「ほう?新しい人ねえ・・・え?嘘・・・?友希那!」

「え?う、嘘でしょう・・・?」

「リサ・・・友希那・・・久しぶり、だな」

「どうしました湊さん、今井さん。お知り合いですか?・・・湊さん?今井さん?」

「友希那・・・」

「一夏・・・」

「・・・その、歌、カッコよかったです」

「あ、ありがとう・・・」

「・・・」

甘い空気が辺りに漂う。

こういう空気に慣れていないメンバーは口の中が甘ったるくなっていたが昔から見飽きているリサは乾いた笑い声を出していた。

ようやく空気に慣れた氷川紗夜が口を開いた。

「今井さん、彼は誰なんですか?貴方と湊さんと知り合いのようです」

が……」

「……彼は織斑一夏、私と友希那の幼馴染みだよ」

「織斑一夏……確か世界初の男性IS操縦者でしたね……」

「あ！そういうえばテレビで見た事ある！」

「わ、私も見た事あるかも」

「それで何故貴方と湊さんは驚いていたんです？」

「そりゃ私と友希那は小学3年生の時に一夏と別れたつきりだからね……9年ぶりなんだよ会うの」

「なるほど……それなら納得が行きます。……ただ幾らなんでも空気が甘いんですが」

「そりゃ友希那も一夏もお互い大好きだからね……両想いなのについて告白するのかこっちはモヤモヤしてたもん（こしょこしょ）」

「ええ……」

「とりあえずあの2人連れて上のカフェ行ってくるね」

「分かりました。こちらは私に任せてください」

リサは未だに恥ずかしがって何を言おうか迷っている2人を連れてカフェに向かう。

しかし、カフェに来て席に着いたものの顔を合わせようとしないうちに夏と友希那を見てリサは強硬手段に出た。

「ねえ、友希奈」

「な、何かしら？リサ」

「ねえ一夏」

「な、なんだ？リサ」

「見てて焦ったく感じるからさっさとお互い告っちゃいなよ」

「ぶほっ!」

突然のリサからの爆撃により口に付けていたコーヒを吐き出す
一夏と友希那。

なおその頃後ろでは箒と鈴が必死にセシリア達を抑え込んでいた。

「い、いきなり何を言い出すのリサ!？」

「てか何で俺の友希那への気持ち知って・・・!？」

「いや気付かない方がおかしいから。多分箒も気付いてたよ」

「え?」

「うう・・・」

「あー・・・その・・・友希那・・・えっと・・・(どうしよう、いざ言うとなるとどう言えば・・・)」

「一夏・・・私は・・・その、あ、貴方の事が・・・(は、恥ずかしくて死にそうだわ・・・!)」

「・・・あーもう!こうなったら!一夏!そこに立って!」

「お、おう・・・」

「友希那も!」

「え、ええ・・・」

「せーの・・・!でえや!」

「きやつ!」

「おっと、だ、大丈夫か?友希那」

「あっ・・・」

焦ったくなったりリサが2人を立たせて友希那を一夏の方に突き飛ばす。

一夏に受け止められた友希奈は顔を真っ赤にしていた。

けど友希那は不思議と嫌な感じはせずむしろ心地良く感じていた。

「(何故かしら・・・恥ずかしいのに一夏といると心が暖かいわ・・・)」

「ゆ、友希那? どうした? 何処か痛むのか?」

「いいえ、違うの・・・貴方と一緒にいると心が暖かいの・・・」

「友希那・・・」

「ねえ、一夏・・・私は・・・貴方の事が・・・」

「待った友希那。それは俺の口から言わせてくれ。・・・友希奈、俺はお前の事が好きだ。愛してる。初めて歌ってくれたあの時・・・いや、違う。初めて会ったあの日からきつと俺は友希那に惚れてたんだ・・・。俺の告白、受け取ってくれるか?」

「・・・ズルいわよ。私が言おうとしてた事全部先に言ってしまったてるじゃない・・・。けど、私で本当に良いの? 私を選んで後悔しない?」
「するわけないだろ? 俺の初恋でずつとお前の事を忘れたことなんてない」

「・・・ありがとう、一夏」

そう言つて友希那は誰にも見せた事が無いような笑顔を一夏に見せた。

リサは漸く2人がくっ付いたを見てやれやれと母親の様な気持ちになつて見ていた。

ちなみに後ろのヒロインズは箒からの連絡で千冬が回収、鈴が付いて行つた。

「ふう、漸く静かになつた・・・。久しぶりだな、リサ」

「箒? 久しぶりー! 大きくなっちゃつてこのこのく」

「それ胸の事か? 身長の事か? それより漸くくっ付いたかアイツらは」

「9年も離れ離れだったのにずっと一途なんだもん。呆れ通り越して天晴だわ」

「ははは、言えてるな」

「つて、やばっ!? もう戻らなきや! 友希那! 練習しなきや!」

「・・・もう少しだけ、ダメかしら？」

「ダメに決まってるでしょ！ほら、いくよ！」

「いやよ」

「ハアツ・・・しゃーない、俺も行くよ」

「ゴメンねー夏・・・」

「私も見学して良いか？」

「いいよー。私達、Roseliaの歌。存分に聴いて行って！」

これは漸く再開を果たした青薔薇の歌姫と白い騎士の物語。

「なあ、友希那」

「何かしら」

「前が見えないんだけど」

「私は貴方が見れて満足なんだけど」

「ダメだこりゃ」

少年に寄り添う白い女神

「……さむっ」

雪の降りつもる街のとある本屋から出てきた黒髪の少年。

コートを着てはいるが今日は特に寒い。

ニット帽をポケットから取り出して被り足早に本屋を後にする。

「時間掛かっちゃったな……拗ねてるだろうなあ……」

普段は物静かで本を読み、コタツでみかんを食べてるがキレると怖い愛する彼女が今頃不機嫌そうに自分の帰りを待っているだろう。

それが容易に想像出来たので少しだけ寄り道して機嫌を直すために最適なあるものを買ってから帰路につく。

「後はこれで……出来た！かーんせーい！名付けてお兄ちゃん雪だるまー！」

「ら、ラムちゃん危ないよ……！（おろおろ）」

「大丈夫よ！下は雪だから怪我はしないわよ！」

教会に近づくともう夕方だというのに外で雪遊びをしている双子の姿があった。

元気で活発なイタズラっ子のラム。

人見知りで擬音を口に出して喋る大人しいロム。

2人とも大切な妹だ。

あのでっかい雪だるまは俺を模しているようだが幾らなんでもデカ過ぎる。

少し呆れつつ双子を呼ぶ。

「ロム、ラム。ただいま」

「あ、お兄ちゃん！おかえりー！」

「お、おかえりなさいお兄ちゃん」

「もう暗くなって来てるだろ？そろそろ中に入らないとみなさんが怒るぞ？・後ラムは直ぐにそこから降りなさい」

「はい・・・」

「お兄ちゃん、その箱なーに？（そわそわ）」

「ん？ああ、これお土産。ちゃんとロムとラムの分もあるよ」

「やったー（わくわく）」

「お土産？わーい！あ、きやああああああ!？」

「ラム!?ロム、これ持っててくれ！」

「う、うん」

お土産と聞いた瞬間にはしやぎ出し梯子から落ちるラム。

俺はお土産をロムに持たせてラムの真下に走る。

足にシエアを流して脚力を強化、何とか間に合いラムをキャッチ。

ちよつと腰が痛かったけどたいした事ない。

「・・・あれ？落ちてない？」

「全く、梯子を降りてる時に手を離したら危ないだろ？いくら下が雪だからって怪我するかもしれないんだからさ」

「ご、ごめんなさい・・・」

「ま、怪我が無いならいいさ。危ない事は控えろよ？」

「分かった・・・」

「お兄ちゃん！ラムちゃん！大丈夫？（おろおろ）」

心配したロムが両手でお土産を抱えながら駆け寄ってくる。

「大丈夫だよロム。さあ、中に入ろう。ブランが拗ねてるだろうs」誰が拗ねてるって？」・・・いつからいたんだ？」

「帰りが遅いから迎えに行こうとしたとこだよ。んで、だあれが拗ねてるって？・なあ？」

「36計逃げるが勝ち！」

「あ！待ちやがれ！逃げんな！」

「待てと言われて待つか！」

これが俺、織斑一夏の今の楽しく、刺激的な日常です。